

# 浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）  
昭和二十四年四月二十八日 郵務省特別掛承認誌第三五二号  
昭和三十三年十二月二十五日印刷 昭和三十四年一月一日発行

第二十五卷

第一号



一月号

新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき B六版・十六頁  
定価十五円・十八円

目次

- 1. 大慈悲の仏教
- 2. 知性を超えて
- 3. 美的情感を超えて
- 4. 本願の不思議にて
- 5. すべてを包む愛
- 6. 人生は信ずる心から
- 7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門 B六版・三十一頁  
定価二十円・二十八円

目次

- 1. 馬に水を飲ませるもの
- 2. 流れゆくもの
- 3. なやみとまよいのもと
- 4. すでに救われている
- 5. 信ずるところ
- 6. 仏を思う
- 7. 新しい生活
- 8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土正月号 目次

表紙・扉絵 結城天童

さし絵・カット 加藤金一

新春随想 いのしし君多謝々々……………武田秀郷(12)

随想「窓」……………岸信宏(2)

高僧と長寿……………清水谷恭順(4)

心も新に……………那須政隆(8)

仏間にて……………伊東余志子(18)

正月と仏教……………松崎可定(15)

中国綺談碧玉の首環……………牧尾良海(26)

正月料理の話題……………編集部(36)

光明浴……………山本恭雄(42)

近代高僧伝山下現有伝……………大橋俊雄(34)

信ずるところ……………竹中信常(22)

——信仰のあり方・その一——

南無阿弥陀仏……………(20) 仏教ものしり帳……………(17)

扉の御法語……………(33) 会員だより……………(45)

童心仏心……………(30) 後記……………(45)

真理の花たば……………(1)……………佐藤良智(38)

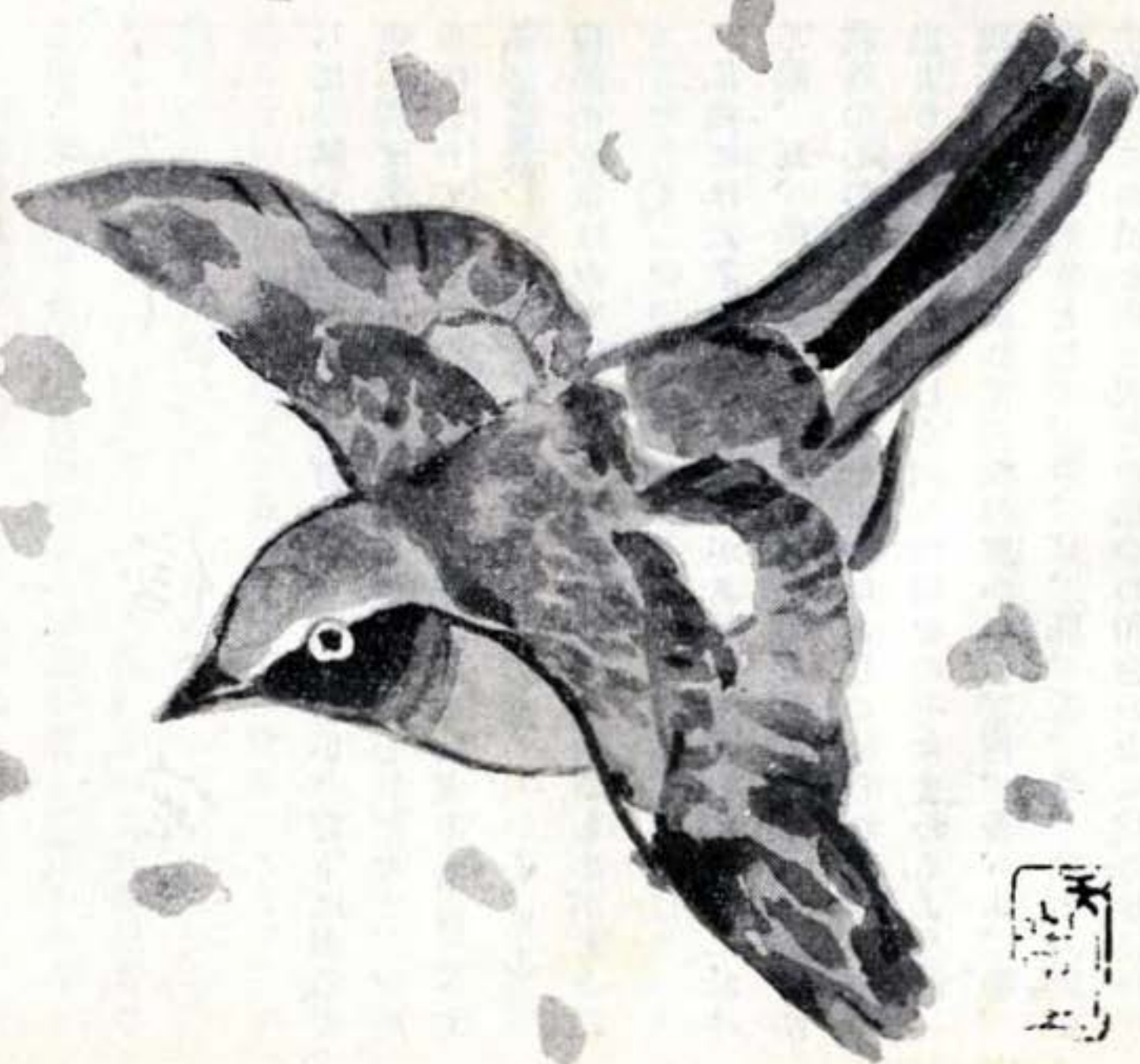
——若き女性への仏教入門——

浄土

正月号

いけらば念仏ねんぶつの功こうつもあり、  
しなば浄土にまいりなん。と  
てもかくても此身このみには、思ひ  
わづらふ事ぞなきと思ひぬれ  
ば、死生しじやう共にわづらひなし。

法然上人御法語



随 想

窓

本年の御歌会初めの御題は「窓」と仰せ出されている。

窓は家の構造の上に大切な部分を占めている。外からは光を入れ、内からは外を観る重要な場所である。唐の白楽天の詩に「夜雪」と題して「己に訝る、衾枕の冷かなるを。復見る、窓戸の明かなるを。夜深くして、雪の重きを知る。時に聞く、折竹の声」というのがある。夜中にふりつもった雪のために枕もとが寒くて、ふと目をさますと、白い雪明りが窓の戸のすき間から見える。時々、裏の竹藪で雪の重さのために竹の折れる声が聞こえる。窓の雪明りと竹の折れる声、夜気沈々としてまさに禅機を孕む境地ともいえよう。

宋の蘇東坡の「軒窓」と題する詩は「東隣に白楊多し。夜、雨声急と作る。窓下独り眠る無し。秋虫、燈を見て入る」というのがある。秋の夜しぐれが急にはげしくふり出

して、隣りの白楊の葉を打つ音が騒がしい。窓下に眠ることも得ずして独り居れば、秋の虫が燈火をしたって、窓からはいつてくる。窓下に物思ふ静かなる秋夜の情景である。春夏秋冬、窓にうつる日の光、月の影、木の姿、鳥の声、自然の点景は窓を通して情趣を深からしむるものがある。

○

仏典には六窓一猿という譬がある。六窓とは人間における眼、耳、鼻、舌、身、意の六根のことである。一猿とは我等の心のことである。一室内にとじこめられた猿が外に出ようとしていそがしく六つの窓をのぞきまわるように、我等の心も縁にふれて六根の窓から色、声、香、味、触、法の六境を対象として、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識を生じ、この根と境と識との三つの和合の上に我等のいわゆる心の働きがあるのである。その心の主体を一として六

窓 信 窓

根、六境、六識の外に独立して存在する如く常識体に考えて説明しているのがこの六窓一猿の譬喩である。これは唯識論など仏教心理の正しい学説によったものではないが、我等の心の散乱騒動のすがたを説明する譬喩としてはおもしろいものである。この六窓一猿のことを隋の慧遠の義章第三ノ末には次のごとく述べている。「有人宣べて説く。六識の心、根に随って別なりといえども、体性これ一なり。彼此に往来すること一猿猴の六窓にともに現わるるごとし。六猴あるにあらず。心識もかくのごとし。六根の中に現わる。六心あるにあらず」

○

我等の心の対象となるものは種々雑多である。それがために我等の心の動揺はしばらくもやまない。このことをば勅修御伝第六には法然上人の詞として「凡夫の心は物にしがひてうつりやすし。たとへば猿猴の枝につたふがごとし。まことに散乱して動じやすく、一心しづまりがたし。無漏の正智なによりてかおこらんや」とのべてある。これは仏教の要旨は戒と定と慧との三学を全うし、無漏の正智をおこして転迷開悟するにあるのであるが、我等は戒行においても禅定においても一つもこれを全うすることができないのであるから、無漏の智慧を起して現身に悟りを開

くというようなことは、到底及びもよらぬことであるという凡夫の悲しみをのべられた詞である。この三学無分の宗教的深い自覚の上に初めて浄土教信仰の出発があるのである。戒、定、慧と次第する聖道門的求道遍歴の旅に、凡夫の救われる道を見出すことのできなかつた法然上人の心に、真実のよろこびを与えたものは万人救済の弥陀の本願であつたのである。弥陀の本願とは万人に修行せられる念々不捨の称名念仏である。この本願への帰依信順はひとえに三学無分の機根の信知にある。この本願の法と自分の機に対する信はおのずから智慧に通ずるものである。蓋し智慧とは正しい判断である。機と法とに対する正しい判断は三学無分の身にもおのずから智慧を具備せしめ、その智慧によって修行する専修念仏の正行はまたおのずから一心境の念仏三昧の禅定の境地に進ましめるであらう。三昧の境地こそいわゆる規を越えざる持戒持律の世界である。三学無分の身が念仏の相続によっておのづから三学成就の身分となり得るよろこびは法然上人の芳躅の上にこれを見ることができるのである。我等にこの境地が直ちに開かれるというのではないが、浄土教の基本線をここに確認して、念仏の修行に躍進し得ることは我等の最大の喜びである。

念仏こそ真実の世界に入る窓口である。（知恩院門主）

# 高僧と長壽



清水谷 恭 順

生き物に最も大切なものは生命であろう。人間も八十まで生きれば先ずは長命と申してよかろう。欲をいえばきりがないのも亦寿命であろうか。

明治時代に芝三縁山増上寺の法主となられた、福田行誠上人は八十の高齢を保たれた。天台の福田堯顥老師は八十八の高寿であった。私はこのお二人を明治以後の二大高僧と仰いでおる。上人は私の生れる前に遷化せられたのであるが、老師には学生時代から四十五年間も、御指導を忝うした私は、之を非常な好縁であったと常に感謝しておる。共に福田を姓とし「ぎょう」まで同じ音であるのも、不思議な因縁を感じ

る。老師は或る時私に対して、「清水谷さん長生するには無理をしてはいけないよ」と、仰せられたことがある。そして老師はそれを実行された。若い頃肺と痔を患らわれたそうであるが、中年以後はその両方とも治って、頑健というのではなかったが、大体健康であった。風など引かれるとすぐ床につかれ、医師がもう起きてもよいというまでは、どんな用があっても休んでおられた。その点決して無理をしなかった。性来学問は非常に好きで、八十以上になっても毎晩おそくまで書見された。

日本天台開宗以来千百五十余年の間に、天台学に於て老師の右に出る人は二三に過ぎない。かかる碩学となられたのも

全く、高齡の結果である。大業を成就しようとすれば短命ではだめだと思ふ。



増上寺の行誠上人は、学徳双備の点に於いては、正に堯顓上人と好一對の先輩であられたが、その上に書をよくし画に巧みに、歌を詠み詩を作られ、実に多趣味の方であつた。もっとも絵をかかれるようになったのはごく晩年のことらしく（増谷文雄師著「行誠上人」二一五頁）、然も自由轉達俳画をよくせられ、夫れに多く歌の賛を施してある。例せば

もろともにすむやたぬきのきん玉を

なかはかりねの四疊半かな

の歌のわきに、どうみても狸とも亦その金玉とも見えぬ絵のような、子供のいたずら書きのようなものが画いてある。こんな絵ならぶきような私でも描けるようにさえ感じる（然し実はそんなものではない）それ程に飄逸である。洒脱である。又

草ふかみたぬきのみすむふる寺は

御のりのつゝみ音もきこえす

と詠って、之は草深い野寺の中に、人間のような形をしたものが描いてある。寺は日本中津々浦々に至るもまであるが、そこには狸のような人間のような丁度私のような物体が、住んではおるが、御のりの鼓はとんと聞かれない世相を歌われたものらしい。

上人は明治二十一年に遷化されたのであるから、丁度維新前後活躍せられたのであるが、当時仏教界もこのような状態であつたことがわかり、その点今日の方がまだ少しはましかも知れない。ということは今の吾々の方が実社会に直面して色々な意味で苦しんでおるではないか。

当山（金竜山）には佐田介石の頌徳碑のようなものがある

る。その碑文の字は当時の書家高橋泥舟の筆であって、実に美事な書風が見られるのであるが、惜しいかな戦災の時近くにあった寺の建物（御供所）が焼けたため、碑面が焼けはげて、ほんの一部分しか残っていない。しかし其の碑陰に行誠上人の賛が彫ってある。それは未だ何にも発表されていないようであるから、本誌に拓本を出して皆さんに上人の徳を慕う一縁にして頂いたのであるが、実に活潑な少しもわだかまりのない、よい書風ではないか、文句も又結構と思う。私は之を次のように訓んで見たが、若し誤読であつたら教えて下さい。

石也未<sub>レ</sub>看<sub>レ</sub>起<sub>ニ</sub>貧<sub>一</sub>瞋<sub>ニ</sub> 石や未だ貧瞋を起せるを看ず

只思<sub>ニ</sub>世益<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>身 只世益を思うて身を思わず

因縁適<sub>ニ</sub>属<sub>ニ</sub>大悲<sub>一</sub>闍<sub>ニ</sub> 因縁ありて適々<sup>たまたま</sup>大悲闍に属す

疑是普門示現人 疑うらくは是れ普門示現の人

と、石とは介石のこと、上人は介石を敬愛しておられたらしい。

上人が佐田介石を、只世を益せんことをのみ思うて身を思わないと、讃辞を惜まれなかった点は、之は所謂お世辞ではなくて、介石の心底を見抜いての讃歎の辞と思う。そのわけ

は介石が歌を自ら書いて矢張り碑に彫りつけてあるところの

国のため法のためとて身をかきり

つくしてはてむたはれふすまで

を見ても凡そ了解出来るのである。

私は上人親筆の丹冊を一枚、今から三十年以前本郷の骨董屋で手に入れた。又一幅の画を頂いて大切に所蔵しておる。

その幅には山に鹿が一匹、四枚半程の紅葉の散り落ちておる徑<sup>みち</sup>に立っており、その下に一匹の犬が、鹿の後ろ姿を見て吠えておる図柄である。之は結城素明画伯蒐むるところの、

「行誠上人遺墨集」の中にもは入っておらない珍品である。その絵に

煩惱の犬はうてと母さらしなや

おぼ捨山にさをしかのなく

と讃がしてある。さらしな（更科）もおぼ捨山も共に地名であり、姨捨山は信州更科郡にある。それを詠いこんで、煩惱の犬は追えども去らず、菩提の鹿は招げども来らずを表わした絵だ。だから鹿は向うむきになっておる。実に面白い絵だ。上人が脱俗的で常に修養に志しておられたありさまが、

生きて脉をうってるような感じがする。又多くのお歌の中に

梅のはなさかぬ垣ねぞなかりける

春は野末をゆくべかりけり

おほからぬ春の日数にうれしくも

けふは花みてくらしつる哉

などいうのもある。明治時代の東京附近の風景、又当時の人々のくらしが偲ばれて偏えに恋しくなる。この伝法院なども明治から大正初期にかけては、大きな紅梅が庭にあり、大小紅白の梅樹があつたが、今は殆ど枯れて了つた。植えても寿命が短かい、人間ばかりでなく、動物にも植物にも、生きにくい世の中になつたものだ。

行誠上人も堯顓老師も共に、決して人をかきわけて、世に出ようとされたことの一度もない方であつた。けれど人々におし出されて色々顯職にもつかれた。共に江戸っ子で、執着心のないさっぱりとした性格であつた。学問はお二人とも好まれたから、随分勉強には無理をなさつたことはあるに違いないが、名利の爲めに無理せられなかつた点は両上人共通の特色だ。

長生きしたい方は、名利の爲めに無理をしないことだとお

もう。

上野を開かれた天海大僧正は、百八歳の高齢まで生きられたが、或る時徳川三代將軍家光が、長寿の祕訣を問われたら小食粗食日湯陀羅尼

時どきど下風遊ばさるべし

と答えたそうだ。大食美食は長生き出来ないようだ。日湯にはいるのは吾々庶民にはむずかしい。私は清潔にと解釈して実行しておる。陀羅尼とは延命陀羅尼のことであろう。之も堯顓老師に勧められて、私は毎日百反以上唱えておる。要するに信仰を怠らねばよいことである。信仰心のある人は凡て己れの業を反省しつつ、み仏の加護を祈りつつ生活するか、生活に無理がない。ご下風とは屁のことだ。之は皆さんにはおすすめしなくとも、適当に実行しておらるるであろう。

天海大僧正も無理のない生活が、百八という長寿の因であつたようだ。

仏教の原理からいえば、必ず生れ変つて来ることであるから、いつ死んでもよいようなものの、この世と次の世との連絡がうまくつかないのであるから、精々長生きするように、お互いに心懸けて、先ず新年の御慶としたい。



# 心も新あらたに

那須政隆

## 新年の慶び

本誌読者の皆さん、芽出度く新年をお迎えになられました心からお慶び申し上げます。新年の喜びは老も若きも変わりありません。私、当年とって六十五歳、またここに新しいお正月を迎えまして喜びと感謝に満たされています。

「元日や、冥土の旅の一里塚、芽出度くもあり芽出度くもなし」と歌った古人の気持を解らぬでもありませんが、しかし、それはちょっとひねくれていやしませんか。なぜもっと無心に、そして素直に喜べないでしょうか。新年早々わざわざ「冥土の旅」など持ち出さなくとも可さそうなのなのに、と思うのは私独りの僻心ひがこころでしょうか。淡々と無心に流れる水のように、橋の柱や岩などに突きあたってゆきには突き当るがよい、そして復た流れるなら流れてゆ

く、断崖にさしかかれば滝となって流れ落ちたら可いではありませんか。人の生命も流れるようにしか流れるものではありません。永い流れのうちには種々の因縁に遭遇するでしょうが、因縁のままに流れていったらよいではありませんか、いや、因縁にさからって見ても無駄であります。さからえばさからうほど因縁の淵は深くなるばかりです。刻々の因縁のまま精一杯に生命の流れを流れ、そこに少しのこだわりもなく、執らわれもない、まことに平和そのものであります。新年という因縁に会えば新年を生きる、病気という因縁に会えば病気になる、順風にも逆風にもさからわず、風に乗りきって活きる、それが「因縁に随順する」という聖語の意であります。

時間そのものには節も句切もありません。時間は常に永遠であります。だが、大自然は「妙」といわれている通り

仲々うまく出来ております。私たちの地球が自転しながら、太陽の周囲を一定の軌道によって絶えず廻っています。地球は春から夏、夏から秋、秋から冬、というように四季の移り変りを成しながら太陽を一周します。それが丁度一年であります。そして冬が終ると改めてまた春から新しい巡廻を始めます。地球がこの新しい巡廻を始めるときが新年というわけです。中にはそんなことが何んで芽出度いのかと仰る方があるかも知れませんが、そんなことを仰るのは、あの「冥土の旅の一里塚」と同様に、人情の自然にさからった考え方です。私たち人間も大自然のうち存在でありまして、大自然の運行と共に移り変わるものがあります。秋風が吹くようになると人の身も心も自然に収って参ります。落葉樹が葉を落して冬ごもりをするように、人もまた身心をひきしめて冬越しをいたします。それが一陽来復の春ともなれば、身も心も窓をあけて、浮き浮き伸びあがって参ります。それは理窟や打算でそうなるものではありません。水が高きより低きにつくと同じように自然の理法でそうなるのです。それで心が浮き浮きはすむときは素直にそうなら可いではありませんか。新年は大自然と共に、もの皆芽出度いのです。大空を仰いて胸一杯に新年の空気を吸いこんで、心明るく新春を祝いましょう。

う。元旦の暁について響く鶏の雄叫が、私の心をひき立ててくれます。愛犬の「くろ」も心なしか一入嬉しそうです。世のすべてが新春を慶んでいます。皆さんと共に新年を心から祝ぎ申しましょう。

### 芽出度いということ

芽出度いということは、いったいどういうことなのか、お互に平素何気なく使っている言葉ですが、さて改めて、芽出度いとはどんなことかと尋ねられるとちょっと返事に困るものです。芽出度いから芽出度いのだといったのでは回答になっていません。雨天とは雨が降るから雨天だと言ったのでは、雨天の答といえません。もっと突きこんで雨そのものの説明から始めなくては、小学校の児童だつて納得しません。芽出度いということも、成る程と納得のゆく説明が必要であります。芽出度いというときの「め」の字は、ものを見る「目」ではありません。「明けましておめでとう」と申しますが、新年早々「目の玉」が飛び出たのでは、めでたいどころか、大変な騒ぎであります。で、めでたいの「め」は木の芽、草の芽というその芽でなければなりません。大自然が冬ごもりをするとき木も草も緑の葉を落して枯れはてたようになります。それが一陽来

復して春風に促されると、草木の芽がニョキニョキと出てまいります。この草木の芽が新しい息吹きをもって出てくるところが、即ち芽出度いのです。新芽が出るのは新しい生命が萌え出ることあります。このように新しい生命が出るからこそ芽出度いのです。赤ちゃんという新生命の誕生なればこそ出産が芽出度いわけです。結婚が芽出度いのも、式典を挙げて三三九度の盃をとりかわし、新郎も新婦も共に、心も新しく新婚生活にはいるのですから、結婚が芽出度いのであります。私たちは三百六十五日という一年間の生活で、心に種々の垢がついて汚れるものであります。それが大晦日の風呂と年越そばで一年の結末をつけ、除夜の鐘につれて心のけがれが次第に除かれ、若水に身器を淨めますれば、不思議と身も心もすがしく、清新の生気に満ちあふれてまいります。神棚や仏壇に燈明をあげ、拍手も清く本年の無事息災を祈ってから、家族打ち揃ってお屠蘇を祝えば、元旦の慶びが完全に充たされるのであります。このようにして新年は無条件に芽出度いのです。

### 随処に主となる

お互に「本年こそは」と年頭に誓いますが、それが日の経つに従って段々薄れてゆき、いつとはなく復ただらしな

くなってしまう勝であります。人間は生物ですから生きんとする欲望をもつのは当然であります。その生命的欲望は自分だけがもつというものでなく、自分と同じように他の人々も強い欲望をもっています。一億に垂んとする多数の人が、この狭い島国に押し合い圧し合いして生活しているのですから、人の欲望と欲望とがしょっちゅう衝突いたします。そんなときどうしたらよいでしょう。人の生命欲を力づくで押しつぶして自分だけのさばり生きようとしたら、いったい世の中はどうなるでありましょう。卑近な例ですが、電車の中で「まあどうぞ」「いやあなたどうぞ」と席の譲り合いをしておられるのを時折見受けます。そうした美しい互譲精神は、知人同士の間柄であるから自然に發揮されるのですが、それが知らない人に対すると、まるで人が違ったように利己一辺倒になり変ってしまいます。全く浅ましいものです。人は何故そうなのでしょうか。知らない同士でも知人同士のようには何故できないのでしょうか。う。「旅の恥かきすて」という良くない言葉もありますが、知人がいない所へ行くと平素と違った野生そのままのようになってしまうのでしょうか。私たち人間は、他人に見てもらわれないと文化人になっていられないのでしょうか。他人目もあるから遠慮しようと思える人でも、誰も見ていな

いといつゝ野獸性を發揮し勝なものです。法律では現行犯でないといふに問われないが、しかし自分の心が犯した罪をよく知っています。「他人が見ていなくとも神仏が見ている、法律が罰しなくとも神罰仏罰はつきめんである」といった宗教的良心が信ぜられていた時代もありましたが、現代では、「神も仏もあつたものでない、宗教など全くナンセンスだ」などときめこんでいる向も少くないようす。仏教にいう仏は自分の心の中にあります。仏を自分の外にのみ考えるのは浅智慧であります。心そのもの、生命の实体、それが仏です。仏は自分の心のうちにあると共に、また万人共通のものでもあります。私の仏も、あなたの仏も別物でなく、平等一体であります。だから私たちが本当の自己に立ちもどつて万人共通の心境になつて見ますと、すべてのものが眞実の姿で心の鏡に映つて参ります。そして他人がいるといはないにかかわらず常に眞実を生きることが出来るように成ります。盗みをしないで心に盗みを思へば自分の仏がとがめます。平和な世の中、幸福な社会というものは、一人々々が常に正しく活きるところに恵まれるのですが、私たちが常に正しくあるがためには、お互が眞実の自己を忘れないよう、しっかりと本当の自己を守るこゝとが肝要であります。古聖が「随处に主となり、従となる

勿れ」と教えたのは、とかく本当の自己を忘れ、うその自己になり勝な悪い癖を悲み憐んだからであります。何時、何処でも、常に自分が自分で動く、他人の眼や言葉によつて動くべきでない、これが自分の眞実を生きる道であります。民主国家は国民が自分たちの手によつて政治することでありますが、国民がそれぞれ自分の都合だけ考えたり、他人の見ている所だけ要領よくやつて、他人がいなければどんな悪事でも働くというようでは、民主国家は成り立ちません。民主政治の中心柱である国民各自が自分自ら正しくあらねばならぬのは理の当然であります。何処にいても隣人同士のように譲り合う心、いつも変らない人間同士の愛情、それが民主的国民の根本であります。それには「随处に主となる」こと、自分が自分でやつて行くことがまず実行されなければなりません。そうでないと警職法の改正が必要とせられ、下手すればどこかの国のように独裁政治となつて、自由どころか、うっかり口もきけないこととなります。新年の新生命は、随处に主となつて、自らわが心を淨くすることでありたいものです。国家や社会は国民の心の反映であります。ともかく私たちの努力で、世界に比類なく良い日本国を造りましょう。

（大正大学長）



新春  
随想

# いのしし君多謝々々

武 田 秀 郷

一

人工衛星に乗った「ライカ」君や、南極探険であつたら、尊い犠牲とはなつたがその名を、永くとどめるに至つた「カラフト犬」などの後をうけて、本年は「イノシシ君」の登場ということに相成つたが、どうも、去年の犬君の人氣が余りに華々しいので、少々割が悪く、舞台効果が上らないようである。

それか、あらぬか、亥年の運勢は、むづかしくいえば、亥は該であり、陽気の下に蔵すとか、或は亥は核で、物みな堅核となるなりといわれて、底力があつて、堅実ではあるが、表面的にはどうもパツとしない

二

ようである。一言にしていえば、犬君が二枚目主役として華手にふるまつたのにくらべると、いのしし君は、わき役にまわつたという観がある。

いのししといへば、我々大正年代人はすぐに、曾我の五郎十郎の敵討ちの前奏曲をなす富士の裾野の巻狩りを思い出す。仁田の四郎に逆乗りされて、あえない最後をとげた大猪のことである。全く、このいのしし君は、仁田の四郎の武芸の手並を引き立たせるための、純然たるわき役であつた。尤も、このいのしし君の大奮戦のためか、「いのしし武者」とて、勇猛果敢なさむら

いの形容詞も生まれたが、これは、その裏に少々皮肉が含まれているようである。鼻柱が強くて、いい出したらあとえ引かずに、誰が何といつても、見むきもしないでまっしぐらに突進する。まことに勇壮活潑ではあるが、その反面、その「お脳」は少々軽いようである。いってみれば、無反省で、一本氣ということになる。これは、大體いのししの習性から出たことらしい。というのは、いのししは俗にいう「猪首」といわれるように、極めて首が短い、というよりは胴から頭が突き出ているといった恰好である。それだから、小まわりがきかず、いちかばちかの一つきで、これがはづれるとそのまま真直ぐに飛んで行ってしま

う。まことに融通のきかないたちである。これが、「退くことを知らぬ」いのしし武者となり、「暴虎憑河の勇」と並び評せられる所以になったのであろう。

新年早々、いのしし君には甚だ気の毒だが、どうも、すっきりとした話題が出て来ないのである。というのは、「いのしし武者」の次に出て来るのが、坊ちゃん嬢ちゃんの人気者、例の「西遊記」に出て来る猪八戒君である。これまた大変な代物で、兄貴分の孫悟空君にいつも迷惑をかけ、お師匠様の三蔵にはあきれられてばかりいる。

八戒君は前生は夫蓬元師と云って、中国の空中に棲む天神の一人だったが、性来、大酒大食の上に、どうも女癖が悪く、ある時、「天母瑤池の会」という、天の神様達の園遊会の時、例によって大酒をのんで酔払った挙句、美人のはまれ高い「嫦娥」にшнаだれかかって、くだをまいたり、手を出したりしたので、とうとう天帝の怒りにふれて下界に放逐されてしまった。ところがだらしのない、のんき者のくせに、何を問ちがえたのか、うっかりして人間と間ちが

えて、猪の腹に宿ってしまったため、この世に出てみたらあろうことか猪の姿をしていたという次第。天性のうえに、かてて加えてのこの猪性が重なったのだから耐らない。天界にあった頃に輪をかけての大食、大酒、多淫の限りをつくした。三十人前の料理を一度に平らげたり、自分の妻君を三年間密室にとちこめてつきっきりでいたり、とに角大変なものだったらしい。三蔵法師が観音様の御命令で、天竺に大蔵経をさがしに出かけることになった時、散々悪いことばかりした八戒でも、せめてありがたいお使いの手伝いをすれば、その功德で、浅間しい所業からぬけ出ることも出来ようかとの、仏さまのおはからいで三蔵法師の相伴に加えられたのだが、西遊記で御承知のとおり、途中、幾多の失敗を重ねて、みんなの迷惑の種とばかりになったのである。それでも、どうやら無事、天竺で目的を達したその御ほうびに、やっと仏さまから次のお言葉をたまわった。

「汝、懶惰にして色情未だ泯<sup>ほろび</sup>されども、淨壇使者とすべし。汝、もと食腸寛大にし

て大食を求む。諸農の仏事供養の時、汝、壇を淨<sup>きよめ</sup>るの職にあらば、供養の品々を受用してよからずや」

お前はなまけもののくせに、まだ色氣が失せておらぬが、御法事の時のお供物壇の掃除役にしてやろう。大体、お前はぐらだから、お百姓が仏事供養の際沢山お供え物をしたら、供物壇を掃除して、お供物のおさがりを腹一杯たべたらよからう。というわけで、どうやら八戒君も働き場所を得た次第で、まことに仏様のお慈悲は広大である。

### 三

わき役ばかりでは気の毒だから、何とかして主役にしたいと、色々苦心していたら、たった一つ目付かった。中阿含經第十六卷に出て来る、いのししの大將が虎に勝ったという話である。仏さまは、またここでも、いのしし君のためにありがたいはからいをして下さっている。但し、主役は主役でも、どうもねえと首をかしげるような主役ではあるが。とに角、その話の内容を御

紹介しよう。

いのししの王様が五百疋の家来を連れて山の中を歩いていると、むこうから虎がやってくる。これを見たいのししの王様は考えた。虎と喧嘩したら負けて殺るされるにきまっている。といって逃げ出したら家来共に笑われるだろう。何とかうまい方法はないだろうか。そう思いながら、そんな気ぶりは見せずに、虎にむかって、「おい、虎君、喧嘩したいならしてもいいぜ。いやなら、そこをどいて俺達を通せ」虎は言下に答えた。「よし、喧嘩しよう」いのししの王様はそこで一計を胸に秘めていった。「よし、それなら喧嘩をしよう。がちよつと待っていて下れ。俺には祖先伝来の鎧があるから、それを着て来る」。虎はどうせいのししの奴何を着て来たって俺の相手じゃない。と、「いいようにしろ」と答えた。いのししの王様はとんで帰って、便所のところへ行って、体中、頭から尻尾まで糞を塗りたくって戻って来た。これを見て虎はおどろいた。「俺は生来きれい好きで、きたない物は嫌い、道はゆずるから勝手

に通れ」虎はこういって、いのししの近くのを遠くからよけてしまった。いのししの王様は大威張りでそこを通りすぎると、虎を顧みて言うのだった。「俺も四ツ足、お前も四ツ足。だのにどうして戦わないのだ、弱蟲め」「そんなことはどうでもいい。早くむこうへ行っちゃまえ、臭くってたまらないや」虎が顔をしかめてそういうと、いのししの王様はふんぞりかえってこういった。「よし、この近隣の国々の者に、お前は俺と喧嘩が出来なかったといいふらしてやるからな」

どうもこれで見ると、いのしし君の勝ち。は勝ちだが、大変に臭い勝ちのようである。もっとも、仏様はこのお話をされた後で、「だから無分別の者にはかなわぬものだ」と、しみじみ申されたそうである。

折角、いのしし君の肩を持つためにさがしたお話も、これでは何にもならなくなってしまった。

いのしし君よ、多謝多謝。

## 謹賀新年

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 福 | 北 | 後 | 広 | 大 | 鈴 | 倉 | 稲 | 正 | 服 | 鈴 |
| 井 | 川 | 藤 | 本 | 谷 | 木 |   | 田 | 本 | 部 | 木 |
| 豊 | 俊 | 眞 | 徹 | 玄 | 義 | 侃 | 稔 | 実 | 寛 | 在 |
| 信 | 嶺 | 雄 | 隆 | 瑞 | 宏 | 茲 | 界 | 乗 | 善 | 念 |

# 正月と仏教



松崎可定

正月は先づ寺々の除夜の鐘から明け初めま

す。過去一年間に積った百八煩惱の心の垢を洗い去って、清浄な心身で以て新春を迎えるというは何と仏教に相応しい行事ではないでしょうか。

それにしても一休禪師は

門松は冥土の旅の一里塚

芽出度もあり芽出度もなし

といって屠蘇氣分に満ちた京洛の人々を驚かしつ歩かれたといいますが、これ又実に良く仏教的な正月観を示していると思いま

す。

「芽出度い」というのは、いうまでもなく本来生長発展を願う意味であります。日月が経過して新年を迎え、齡を加えるのは、確かに一面発展ではありますが、同時に又他面衰亡への歩みでなくてはなりません。子供達がすくすくと生長するのは喜びであり乍ら、又我身の老化に一抹の淋しさを味わされるのです。光陰は人を待たず。生者必滅の理の通り死の世界の歩々に近付くことを知るならば、これはうかうかとしてはいられないこと

をあらためて自覚します。これこそ屠蘇に酔っている以上に、芽出度いことでなければなりません。

一つの物の見方のみが唯一の真理でなく、他の見方も同時に成立することを知って、而も時に従って価値ある見方をすることが尊いのです。故に正月も「芽出度くもあり芽出度くもなし」と知る事が、唯芽出度いとのみ思っているよりは、一層芽出度いことでなければなりません。「日に吉凶なし、吉凶は人にあり」というように、元日という日そのものに芽出度さがあるのでなく、これを芽出度くするものは人である筈です。

芽出度さも中位なりおらが春

流石に一茶は中道を楽しんだ達人です。

—○○○—

浄土宗の寺院では、元旦に修正会といって今上天皇の玉体安全や、担信徒の家門清寧を祈る法会を修することになっています。

それにしてもこの頃は、このような修正会は「あるべき仏教」でなく、「あり得べからざる」仏教の姿であるかのように論づる学者も出て来ました。然しそれは恰も以前に「仏

教は偶像教である」としたのと同様の、本質的な誤りを犯しているように私には思われます。形が原始宗教に似ているからとて、直に低級視するのはどうかと思います。形に現われる内なるものを見落してはなりません。

宗教儀式は呪術でもなく、又技術でもありません。祈ることによって念願が満足されるものではありません。宗祖上人も「いのるによりてやまひもやみ、いのちをのぶる事あらば、たれかは一人としてやみしぬる人あらん」といわれています。併し乍ら、他人の幸福を祈る事は好ましいことです。効果のあるなしは論ぜず、気の毒な人に対しては、何とかしてあげたいという心の起るは麗わしい事です。これが善意であり、誠又は真実心です。この心の表現が宗教儀式となるのであって、形はともあれ心が大切なのです。

心だに誠の道に叶いなば

祈らずとても神やまもらん

この歌の通り、御利益ありとすれば、それは誠を尽すことによる冥助であり、求めずして自らに得られる処の恵みであるべきです。念仏一念に大利無上功德があるというのも、

この真実心の尊さをいうものと思われまゝ。宮本武蔵は「神仏は崇とし、神仏に頼らず」といつていますが、崇むべきものと頼るべきものとを混同しない処に、正しい信仰があると思います。

次に又天皇の安全を祈る事は、主権在民の現在に又天皇を神格化するものだとの非難があるかも知れないが、天皇を国民統合の象徴と見る現在の見方からすれば、天皇の安全を祈ることは同時に国家国民の安全和平を祈ることになるから、これ又何等の不都合もないように思われます。従って、修正会は仏教的に見て決して好ましくないのではなく、真実心、仏心の拡充を目指す尊い儀式というべきでありましょう。

—○○○—

兎も角、永年に亘って大勢の人々によって好んでなされている事の中には、何等かの意味の真実があるものです。外来の枠に当てはめて、簡単に捨て去るべきではありません。

例えば、又正月にはお供餅を、神仏のみでなく、井戸、かまど、便所、物置等から鍬餅の類に至るまでお供えする習慣があります

が、これも形のみ見れば、庶物崇拜の原始宗教に似ているかも知れませんが、併し、その奥には無意識的乍らも、それら人間生活に欠く事の出来ない物に対し、たとい年に一度でもその徳を多とし感謝する尊い心があるのです。(花供養、針供養等、又同様です)

心の無い無生物に対してすら、恰も生きた人間に対するかのような心情を以て接するのは、天地自然から始まる全てに対して恩を感じる仏教の養い来った尊い心情だと思ひます。

—○○○—

又正月には私共寺院でも門松を立て、神棚その他便所に至るまで注連飾りをします。これも亦人によっては非仏教的だとされるかも知れませんが、けれどもこれ又そんなに頑くなく考える要はないと存じます。

仏教は空無自性といって、物を固定的、存在的には見ないで、形式にとらわれない自由さを本領とします。従って、神を祀る形が仏をまつる形と必ずしも衝突するとは考えません。形式はもとより仮のもの故、一般的に神を祀る形式を寺院において時に取ったからと

て、あなたがち咎める要ありません。のみならず、本質的には仏神は一体と見て支障ありませんし、又これが日本人の信念です。仏教は神道の或る種の形を借りたからとて、その蔭に覆い隠されてしまうような小さなものでなく、却ってそのような形を包んで尚余りある広さと深さを持つものです。このような広さの中に地域的特殊な色形を含んだからとて、仏教としては損減する処はなく、一層の豊かさを増すものでありましょう。このような意味において、寺内に神を祀る事も、又時に注連縄を張る事も敢て異とするに足りないと考えます。

### —○○○—

屠蘇を酌んで邪鬼を払い、福茶を呑んで福を願うのも、現在では恐らく本来の素朴な信仰的なものではなく、生活の変化と豊富さを求める文化人的心情においてなされている事を知るべきでありましょう。

或は又若水とか、初日の出等も、私共の日常身近かな物に対して、時に新らしい気分が温い血の肌触りを感じる事は、人間智能の低劣を物語るのではなく、寧ろ人間の高貴を示

## 仏教ものしり帖

### 菩薩

ボサツ。詳しくはボーディサットバ、菩薩垂という。観音、地藏、文珠、普賢などみな菩薩である。菩薩は仏の次の位にあるもので将来必ず仏になる資格を持ち、六波羅密（布施・持戒・忍辱・精進・禪・般若）の六行を修し、上には菩提（悟り）を求め、下には一般衆生

を化益するをいう。釈尊についていうと、昔々、錠光仏が出世したその時釈尊はスメーダーという波羅門として生れ、この仏の前において将来必ず仏になることを誓い、波羅密を修して遂にカピラ城のシッタ太子として生まれ、二十九才にして出家し苦行六年後三十五才で菩提を成じて仏とられた。その仏とされる前の釈尊を菩薩というのである。

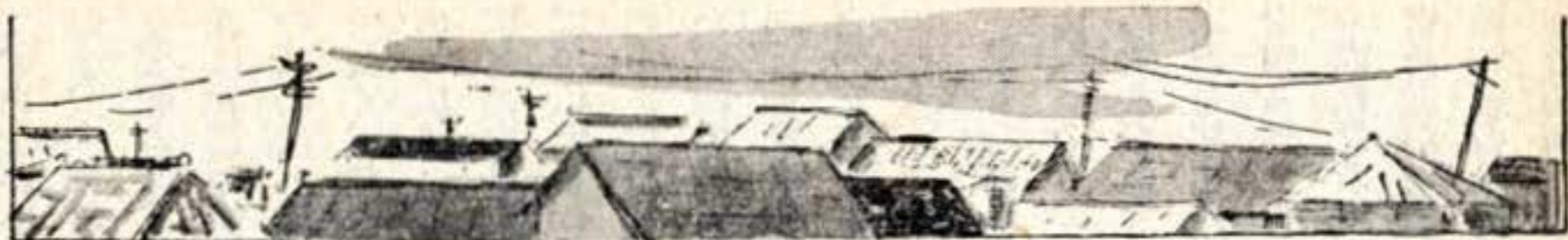
すものと思われまゝ。

人間自己能力の過信は、人間を四囲の環境より孤立閉鎖的にしますが、自分の弱さ、有限性を自覚するものは、他に対し謙虚と親近感を持たざるを得ないのです。天地同様万物

す。このように見て来ますと、正月の行事は決して原始宗教の遺物とか、古い信仰の名残りとかのみ見るべきでなく、現代的人間性恢復の為に、極めて意義あるもののように私には懷しまれます。

一如感は現代人のような知性分別に悩まされ、マスコミや、オートメーションに疲れた人間の魂の故郷ではないでしょうか。これが人間の実存であり、仏教的に見れば、これが取りも直さず小我より大我への発展ではないでしょうか。無縁の慈悲といったものはこのような根元から育って来るものと思われま

「新年おめでとう」の挨拶は決して表面的な冷い単なる形式ではなく、ほんとうに人間の最深奥処から出る純粋な、人間本来の善意の現われと私は解します。毎年頭に当って、心から他を祝福する尊い行事を持つ事を、仏教者として心から嬉しく思うものであります。



# 仏間にて

伊東余志子

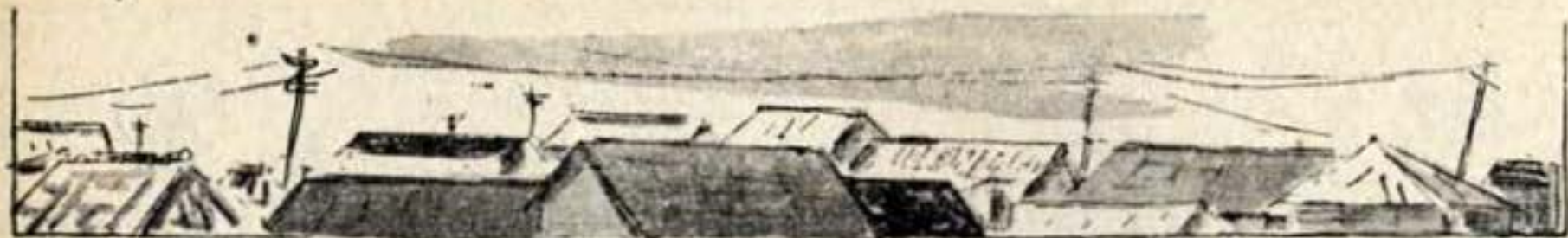
主人深水の亡母は法華經の信者であつた。伊東の家は真宗なので、俗に言う門徒物知らずで、他宗のことは何も知らないけれど、日蓮宗は母の信仰であつたので、今は故人となられた三吉日照上人には私も三十幾年の永い間、手を取り、懇ろに自ら行ぜられながら、教えを受けたものである。

三吉上人は先年仏教界を代表して、アメリカに招聘せられ、其責任を完了せられて、今日蓮と言われた程、徳の高い方であつた。一昨年突如遷化されたことは嘆かほしいことではあるが、其足跡は今も生々と輝いている。宅の仏壇の中にも、その遺影のお写真がいつもニコニコとして、私をお守り頂いている。伊東の家は真宗でいて、墓のあるお寺は浄土宗で、姑は一代法華ということになっているので、私はいつもそれが気になって、これは何とか上手に纏めて置かなくては、子供の代には困るであらうと思つて、日照上人御在世中にも、時々其話に触れたが、とうとう今にその

ままになっている。

日照上人との關係上御令息が後をお継ぎになつても、又同じ様に矢張りお心にかけられて、自ら供物を供えられて、この小さな仏壇に日蓮宗のお経が朗々としてあげられる。私はそのお姿、音量の豊かで、美しく先代父上そっくりなので、いつも御衣の裾に控えていて錯覚を起しそうになる。この先考日照上人のお姿が恰も姑の上に現われていた。姑は私が嫁ついでからは、兎角私が家事に没頭していたせいか、仏様へのお勤めを一切自分でなされ、在家信徒として、身を以ての行持に、映じ出されるたたずまいには唯甘えて来たが、この姑の信仰の力というものを私は今やっとなげに解るように思うのである。

姑はいつも深水にお前は神の申し子だから日本一の偉い人になるのだ。と言ひ聞かせられていた。この神の申し子も、子供の頃は手に負えない腕白者であつたらしい。



姑なき後を引受けて、私はこの神の申し子にどんな気持ちをもっていただであらうか。今思い出しても恐ろしい程、後生大事に勤めて来た。われ乍らよくやり負せたと、省みて悔ゆることを知らないが、病魔に取憑かれてからは、主人との位置顛倒で、今はすっかり甘やかされている。

何しろその神の申し子ということが、私の耳にもひどくこびり着いていたので、私は主人を如何に大切に思ったことか、姑の気持ちに添わなくてはならないのであった。

主人の身につけるものには、たとえ足袋のコハゼ一つにでも、誤って女中達が足でも触れたら、承知出来なかった。これから出世すべき大切な人の身につけるものである。かりそめのことも大切にと注意した。

斯うした事は昔の人間の世迷言でもあらうが、当今の娘さんにこんな話をしたとて、可笑しくってと言う位のもので、何の甲斐もない事のように思うのである。

夜具を敷くにも、ズカズカと蒲団の上に乗ったり、跨いだりは平気である。私は大切な五尺の身を横たえて、よき夢を結びたいのでそんな事は大嫌いであるがそれを一々文句つけていたら、今の娘さんは驚いて、

帰って了うかも知れぬ。

私も病身となつて、何でも人手にまかす方が多くなつたので、苦々しく思い乍ら、黙っている様になつたが、私の許に働いている娘達にはささいな事にも、面倒臭いという様な気持ちを捨てて、親切丁寧に頼まれた仕事に対しては最後まで、責任を以て貰い度い。

嘗ての日、私は三吉上人に、私まだ信仰とはどんなことなのか、はっきりわからないのです。と申上げたら、上人は今頃そんなことを質問されるとは思ひませんでしたと、あっけにとられた様な面持ちで、信仰なんてそんなむづかしいものではありませんよ。例えば早い話が、溝の向側の人とその溝を跨ぐのに困っていたら、手を差し伸べてあげることです。又書生さんが玄関をお掃除するのが役目であつたら、そのお掃除を丁寧、懇切にすることです。と仰せられた言を、今フト思い出した。敢えて日常の茶飯事だけではない。あらゆることに、その愛念が大切であることを教えられたのであつた。永らく疑問にしていた吾が家の宗旨の事もどうやらひとりでに解決がつきそうである。秋深みては朝冷えも、一層淨らかに仏鈴の余韻又一入に永遠の地底に、沁みて行く思いである。

(筆者は伊東深  
水画伯夫人)

## (南)

極探險隊の人々は、今頃どんな苦  
勞をしていることだろう。内地で  
は、クリスマスだの、お正月だの  
と、結構楽しんでる時に、科学の使徒と  
して、黙々と苦闘している探險隊の人々の  
心は、何を考えていることだろう。

去年は接岸に失敗し、幾多の愛犬を残こ  
して、涙ながらに引き上げて来た。今年こ  
そは立派に成功して、尊いいのちを捧げた  
犬達の冥福を祈りたいものである。

接岸に成功しても、資材を運び、越冬隊  
を無事に残こさねばならず、また越冬する  
人々は、一カ年雪に埋もれてくらさねばな  
らぬ。むしろ、この一カ年間、雪の中で行  
う色々の調査こそ、探險の目的なのだけ  
ら、前途はまさに遼遠である。

私共は、往々にして、「宗谷」の勇姿や、  
華々しいヘリコプターの活躍に目を奪われ  
がちだが、それはみんな、冬ごもりして、  
コソコソと調査するための、前奏曲なので  
ある。しかし本当の主題はその後に出るの  
である。終曲まで熱心に見守ろう。(N)

## (無)

差別平等ということは、賢愚、貧  
富、身分の差別なく、みな平等に  
人間性を育成することができると

いうことである。民主化とは、無差別平等  
の立場にたって、基本的人権が尊重される  
ということ。昨年末のこと、プリンセスが  
民間のなかより選ばれた。むしろ皇室の歴  
史上空前の事といえる。新玉にふさわし  
い、日本の空をたれこめていた暗雲が、サ  
ットはらいのけられたような明るいニュー  
スである。戦後天皇は国民の象徴とされて  
はいるが、皇室をこんなにホホ笑ましく、  
また身近かに感じた事はなかった。戦前の  
ことを思い浮べて泌々と歴史を感じる。殊  
に一般庶民とは異って皇室というところ  
は、我々のはかり知れない古いシキタリが  
あると聞く。それなのに、旧習にわずらわ  
させず皇太子御自身及び側近の叡知と勇氣  
によった決断は頼しい。そこに深い共感と  
歓声が湧くのである今後御両方は、お互の  
愛と信の育くみと共に、すべてこれから  
責任と創意に委せられたわけ。ひたすら御  
多幸と御繁栄を祈ってやまない。(A)

## (阿)

弥陀様が南極観測船「宗谷」に乗  
って南極に向った。これは昨年南  
極に散った樺太犬の霊をまつり、

二度とこのようなことがないようにとの悲  
願をこめて、「樺太犬のおばさん」といわ  
れる成瀬幸子さんの発願によって、東京芸  
大の山本豊市教授が、新薬師寺の如来像を  
モデルに製作した高サ二十五センチのプロ  
ンズ製。

南極のきびしい気象に傷まぬようプロン  
ズの厚さを二倍にし、底に二つの穴をあけ  
て、樺太犬が生前訓練を受けた場所、北海  
道の稚内公園と北大付属博物館の土が結め  
られている。

御承知のように樺太犬は冬場の北海道の  
唯一の交通機関。それだけ土地の人々の樺  
太犬に対する愛着は非常なものである。私  
達はとかく、自分自身の身近な事でないと  
観念的になり、声のみで本当のものが生れ  
ないものだ。「宗谷」が無事に接岸出来、南極  
の岩にボルトで固定され、南極への仏教渡  
来一步を足し、観測の成功を祈ろう。(T)

# (弥)

次さん、喜多さんでおなじみの、東海道五十三次を、一日で往復する「こだま号」が今日も矢のように、レールの上を暴進している事であろう。

水さかずきをして、わらし、きやはんで歩いた松並木が、一瞬のうちに流れ去り、川どめで幾日も空しくすごした大井川も、アッという間に走り渡る。まったく、世の中は便利になったものである。東京と大阪が隣り同士になってしまったのである。こうして、地球は段々狭くなって来たが、それは空間の支配である。ところでは時間の方はどうかというと、これまた、平均寿命がのびて来て、それだけ時間を自由にする事が出来るようになって来た。

しかし、無量寿、無量光であらせられる阿弥陀さまからいわせれば、それはほんのささいなこと。水たまりにわいたポーフラのような、人間の姿でしかない。よくみると、そのポーフラどもが此頃ではみんなフラー・フープをして遊んでいる。あきれたものである。(N)

# (陀)

羅尼ということばがある。能持ま

たは能進と訳して、能くすべてのものごとを摂めたもって忘れ失わない念慧の力をいう。それは種々なる善法を能く持つから能持、種々なる悪法を能く遮するから能進と称する。ところが、私たちの住む社会は、種々なる善法はよくたもたれずして、悪法のみさかえるのは如何としたものだろう。善法ありとしてもそれを担う人悪しければ、善法また悪法と変ずる。世論にいためつけられた警職法、勤評等そのよき例。家の興亡も、国家の盛衰も、すべてその基本となるものは人たることを忘れてはならない。法は人を律して安寧秩序を保つために必要は勿論のこと、さりとてゆき過ぎると学問、思想、信仰等の自由まで脅かされ、更には、オイコラと基本的人権まで侵害されるに至るとすれば、言語道断である。白亜の殿堂よりのがれて謙虚に陀羅尼をとのうべし。さすれば悪法もまた善法に変わって社会の安寧うたがいない。(A)

# (仏)

教用語で現今我々の日常語にまで普及しているものは多いが、その中の一つに「塔」がある。

東京の都心芝公園に世界一と称するテレビ塔、"東京タワー"が出来上った。とかく新しいものが出来ると功罪相中ばする。例えば、テレビのお陰で、お勤め先の主人が早く帰るようになり、一家そろっての夕食が出来るようになった反面、家族同志の話合の時間がなくなった等々。PTAのお母さん達は、子供が勉強しなくなった。と云いながら、毎日「月光仮面」の時間を楽しみにしたり、これではアブハチ取らずになっってしまう。教育テレビも出来ること、大いにテレビを生かすことだ。

この東京タワーの影響で付近も大変に変わって来た。やれ地価が上ったとか、お菓子会社が売店の位地で争っているとか。まあまあ、せまくて騒々しい世の中のこと、地上はるか、百五十メートルの展望台の上は、人の気の英気を養ってくれることだろう。(T)

# 信ずるころ

— 信仰のあり方・その一 —

竹 中 信 常



うといった気分が湧いてまいります。一日の生活を、コツコツと積み重ねて一年の歳月を数えます。年末につづく新年、春からそして夏へと、季節は時の刻みにつれて大きくめぐって行きます。その時の刻みにのって、私共の生活も、一日一日と営まれておるのであります。

私共の毎日の生活は、朝起きて、一日働いて、夜になればゆっくりと休む。これが順調にくりかえされて平穏なのであります。ところが、時にはそうでないことがあります。思いがけない突然事故が起って、毎日の生活のリズムが乱されることがあります。昨夜は元気よく床に入ったのに、夜

中から、急にお腹が痛み出して、朝になっても起きられなくなることもあります。そんな時には、一日中、床の中でイライラして暮さねばなりません。毎日の生活がスムーズに運ばれている間、私共は、それが当り前のことに思え、平気になっています。しかし、何かことが起ると、それまでの、当り前のことが、この上もなく尊いものに感じられて来るのであります。

では、なぜ、私共は毎日の平凡な生活を当り前のこととして、平気ですごしているのでしょうか。それは、私共が、自分自身の生活を信じているからであります。或いは生命（いのち）を信じているからです。

「一年の計は元旦にあり」と申しまして新春は何かすべてが、みな、あらたまったように感じられて、今年こそは大いにやろ

太陽は、夕方西に入って、朝、東から出る。これが当り前でありますのと同じように、私共も、夜になると床の中にねむり、翌朝になると、元気に目をさまします。ねむる前に、自分のいのちを疑ったなら、どおして平気で眠むることが出来ましょう。自分のいのち、自分の生活を信じているからこそ、平気に寝入ることが出来るのではないでしようか。

こうして、私共の生活は、まづ自分というものを信じ、自分の生活を信ずることから始められているのであります。

## 二

信ずるということは、このよのに、平気で、当り前の心でいるということにほかなりません。私共は、時々床屋へ行つて、顔を剃つて貰うことがよくあります。ふと、目の前の鏡を見ますと、床屋さんが、キラキラひかるカミソリを持っているのが映っています。そんな時、ふつと思うのです。もし万一、この床屋さんが、急に気がちがつたらどおいうことになるか知らん。ところが、その心の下からすぐにまたこうも思

うのです。そんな馬鹿なことがあるものか。そんなことは馬鹿げた妄想にすぎないじゃないか。そんなことはあり得ない。そう思うと、安心して、いい気持ちになっ

て、ウツラウツラと居眠りさえ出てまいります。それは、床屋さんを信じているからです。いわば、安心してまかせ切ってしまうのです。だから、居眠りも出て来ようというわけなのであります。このよう

にして、私共は、バスに乗ればバスの運転手に、タクシーに乗ればタクシーの運転手に、まかせてしまうのであります。

乗物ばかりではありません。商売をするにしても、やはり、相手を「信用」しなければ駄目です。恋愛をするにしても同じで、恋人を信じてこそ、始めて愛を語り合うことが出来るというわけです。家庭生活でも、それは夫婦や親子のお互同士の信頼の上に成り立っているのです。

つきつめて申しますならば、人間の生活というものは、すべて、この「信ずる」という気持ちの上に成り立っていると申せましょう。信ずる心がなければ、人間は一日一瞬も生きていくことが出来なくなります。



### 三

信ずるということは、先程も申しましたように、安心してまかせ切るということでもあります。しかし、すこしく深く考えてみますならば、実は、ただそれだけでは足りないのです。信ずるということの中には、もう少し積極的なもの、(気分)が必要です。床屋や、タクシーの運転手に自分の体をまかせるのは、ただそれだけのことです。いやならやめられます。信用が出来なければ、ほかの人を選ぶことも出来ます。自分の意志一つで、どうにでもなるのであります。

ところが、私の申します「信ずる心」というのは、「心のよりどころ」になるようなものを中心にかけている心でなければならぬのです。それを信ずることによって、「安心が出来る」「心がおちつく」。そういったものが含まれていなければならぬのです。ですから、自分の方から進んで、それを求めようとする「積極性」がある。そういった場合の心の状態、いわば、自分がこうと思ったものにむかって、自分

の心を開放すること、ひたむきの心、仏教でいう「一向専念の心」、ほかのことには目をむけずに、それだけにむかってつきすすむ心の態度、一種の「心のポーズ」これが「信ずる」ということになるのであります。そして、こういった心のポーズがきまれば、人々は安心して各自の生活を営んで行けるのです。「あの人は信念的な人だ」といわれるような人は、心に、何かしっかりしたものを持っているようであります。そして、それにむかってしっかりとつきすすんで行く。ですから、その態度には確固不動のものがみられるのであります。

人間が、精神的に強く雄々しく生きて行くためには、どおしても、何かしっかりとした心の「よりどころ」を定めて、これに信じて行くことが必要のようであります。そうでないと、いたずらに右往左往して、おちつきが出てまいりません。

### 四

ところで、それならば現代に生きる私共は、一体、何を信じ、何をよりどころとして生きているのでしょうか。「現代の神々」というテーマで新聞に論説が出たことがあります。今日の日本人は一体何を信じているのか、どおいうものを神(のようなもの)として信じているのかということ、色々のものをあげておりました。その二つ三つを申してみますと、まづ第一に、現代の日本人は「機械」を神として信じているとのことです。現代はオートメーションの時代といわれ、電子計算器をはじめ色々の機械が、人間の生活を豊かにすると同時に複雑なものにしております。テレビと電気洗濯機と電気冷蔵庫とが現代人の「三種の神器」として、各家庭で神棚の代りになっております。そして、今や機械は人間に使われるのではなく、機械自身が考えたり、判断したり、選択をしたり、時には怒ったりして、逆に、人間を支配する段階になって来ました。いやおうなしに、機械を信ぜざるを得なくなったようです。

また広告・スローガンへの信仰というものもありました。新聞やラジオ、テレビその他凡ゆるものを使って、たえず宣伝されると、いつの間にか、これが人間の潜在意識の中に刻み込まれて、しまいには、それ

が人の心を支配するようになってしまふの  
であります。丁度、偉大なる阿弥陀如来の  
みひかりが、それと自覚しない凡下の衆生  
を照らして、いつしか仏性を磨き出すこと  
にもなるようであります。

スピードも、現代人にとっては神だとも  
いっております。こうした色々の神のほか  
に、私は、これに「イズム」、すなわち……  
主義とか流行といわれるものを加えてよ  
いかと思います、かつては、人間が主義や  
流行を作ったのであります。ところが現在  
では、主義や流行が人間を作り出して、  
「……型」の人間が出来上ってしまうので  
はないでしょうか。マンボ・ズボンにダス  
ターコートが、現在の青年を作っているの  
は、まさにこれなのであります。

## 五

いづれにしましても、現代人もまた何か  
にたより、これを信じて行こうとしてはお  
るようです。それならば、私共現代人は、  
そういったものを信ずることによって、果  
して、安心し、おちついて日々の生活をく  
らしているでしょうか。決してそうとはい

えません。

現に、台湾海峡には戦雲が棚引いており  
ます。中東や南米では、常に民族主義のク  
ーデターがくりかえされています。世界  
は、二つの陣営に分かれて、冷たい対立を  
示しております。いつ、どこで、何がおこ  
るかも知れません。そうした状況にあっ  
て、私共は、一体何をたよりに出来るので  
ありましょうか。国家をですか。不可侵条  
約をですか。国際信義をですか。いいえ、  
みんな、たよりにはありません。私共日本  
人は、つい先年日本の国家をたよりにした  
ばかりに、その結果、原爆の洗礼をうけ、  
敗戦の浮き目に会いました。日ソ不可侵も  
一片の空文になったことは記憶に新しいこ  
とです。

もっと小さく、身近かな個人的な場合を  
考えても、昨日まで手を取り合って共に働  
いて来た年来の友人が、今日は、はげしく  
憎しみ合う敵となることもあります。最愛  
のわが子に裏切られて、悲痛の涙を流がす  
母親もおります。昨日まで元気で働いてい  
た夫が、今日は亡き人の数に入ることであ  
るのです。

世の中の凡ゆるもの、とことは、移り、変  
り、流れ、動いているのです。仏教でいう  
「諸行無常」であります。政治も、科学  
も、思想も、機械も、人の心も、すべて刻  
々に動いております。それですから、そう  
したものをよりどころとしていたならば、  
一緒に押し流がされてしまふのは当然で  
す。たよりにすべきでないものに、たよ  
り、すがろうとするところに、人の世界  
の、わざわい、なやみ、まよいが生れて来  
るのです。

親鸞上人の歌に、

明日ありと、

思う心の仇桜あだざくら

夜半のあらしに、

散らぬものかわ

というのがあります。深く味合うべきだ  
と思います。

(筆者、大正大学教授)

中国綺談

# 碧玉の首環

牧尾良海



大唐の御代の、広徳年間のことである。孫恪というひとりの秀才があった。文官試験を受けたが落第してしまったので、仕官の道もなく、洛陽で唯ぶらぶらと日を送っていた。

ある日のこと、魏王の池附近を散歩していると、一軒の大きな邸宅が眼についた。まだ木口も真新しく、つい近頃にでき上ったばかりの家ようであった。そこで通りがかりの人に訊いてみると、「ここは、袁家のお屋敷ですよ」

と言うのである。孫恪は、囊中も乏しくなつて来て、どこか廉い部屋でもみつけて移りたいと思つていた矢先だったので。早速そこへ行って門扉を叩いてみたが、中からは何の応答も無かった。正門の傍に小じんまりとした一間の建物があり、綺麗な廊やカーテンが

がまるで芳ばしい蘭のようで、その膚の色といったら微塵のかげりも無い、きらきらした玉を想わせるばかりの美しさである。孫恪は、てっきりこの家の主人の娘に違いないと思つて、物蔭にそつと身を忍ばせたまま、その女性の様子を窺み見していた。女はそのまま庭の方へ出て、そこに生えている萱草を一本摘みとると、そこに立ちすくんでじつとものおもいに沈んでいたが、やがて詩を一首吟誦し始めた。

この草を、忘れぐさとひとは言うとも、

いまのわれには腐れ草なり。

青き山白き雲のみ、それのみを、

下っていた。これが応接室だろうと見当をつけて、孫恪は構わずに簾を上げて中へ入つてみた。ものの十分も経ったとき、突然、奥の方で中戸の開く音がしたかと思うと、蟬やくばかりに美しく艶麗なひとりの若い女性がこちらへやって来るのである。その女性には、月光に照らされた明珠と言おうか、或は烟霧たちこめた中の新柳と言おうか、全身

心を展ぶるよすがとせん――

美しい声だが、その顔色は惨として痛ましく、いかにも悲しげであつた。詩を歌い終ると、女は庭を横切つて来て、応接間へ入ろうと簾を上げたが、そのと、たんに孫格を発見して呀々と驚き、恥じらひで真紅に頬をそめると、身をひるがえして奥の方へ駆けこんでいった。彼女の命を受けたのであろう、すぐに一人の侍女らしいのが出て来て、孫格を難詰した。

「一体、貴方はどなたなんですか？　どうしてこんな夕方近くに此処へいらつしたのですか？」

孫格も慌てて、部屋を間借りする目的でやって来た訳を話し、そうして又、

「いきなり貴女がたをびっくりさせてしまいました、何とも申し訳がございませんが、今、申し上げたような次第ですから、お嬢さんにも何卒悪しからずとお詫び申し上げますといて下さい」

と言ひ添えて、ひたすらその非礼を詫びた。

侍女が奥へ行って孫格の話を伝えると、かの女性は、

「わたし、こんなひどい恰好をして、何のお化粧もしていなかったのに、あのお方はカーテンの影からすっかり見ていらした訳だわ。今更逃げ隠れしてみても仕様がなないじゃないの。ですから、あのお方に中のお部屋で、少しの間待っていてもらいなさい。少しはおめかししてから、妾もお目にかかるわ」と言うのであつた。

孫格は、女の美しい容貌にすっかり心を奮われていたので、正式に会ってくれるという話を聞いて、内心わくわくして喜びを押え切れぬほどであつた。待っている間に、

「あのお方は、どなたのお嬢様なのですか？」

と訊くと、その侍女は、

「お嬢さまは、もう先にお亡くなりになった袁長官の御息女ですが、おちいさい時にもう御両親様と死に別れなさつて、おまけに御親戚ともありません。ただ私たち三四人がお仕えして、みんなでお屋敷に住んでいるわけです。お嫁に行きたいと思つていらつしやつても、まだなかなか、いいお相手が見付からないんですよ」と答えた。しばらくそうして待つてゐると、やがてその女性が出て来て孫格に對面した。彼女は、さっき窺み見た時よりもなお一段と美しく見えた。侍女にお茶や果物を持って来るように言いつけると、孫格に向つて、

「先生がもしお住いになるお部屋が無いようでしたら、お荷物をここへお運びになつて、この屋敷うちにお住いになつても構ひませんのよ」

と言つた。そうして、そこにゐる侍女の方を指さしながら、

「何か御用がおありでしたら、この女中たちに御遠慮なく言いつけてやらせて下さい」

とまで言つて呉れた。

孫格はすっかり感激して、彼女の厚情に甘えることになり、荷物一切を袁家の方へうつした。彼はまだ独身だったので、この女の美

貌にすっかり魅了されてしまつて、引き移ると間もなく、適当な媒人を頼みこんで結婚を申し入れた。女の方でも喜んで承諾したので、事はすらすら運び、ついに彼の妻になることとなつたのである。

袁氏は大層な物持ちで、金銀財宝から布帛の類に至るまで、どのくらい豊富にあるのやら計えきれぬほどであつた。孫恪の方は、長いこと貧乏暮らしを続けていたのであるが、袁氏と結婚してからというものは、忽ちのうちにすばらしい車馬や衣服道具などを備えるようになった。親戚や友人連もこれには驚くやら不審がつたりして、皆がその訳を知りたがつたが、彼は本当のことは何も答えようとしなかつた。そうして、財物のあるのに任せておごりにふけり、立身出世のことなどはどこ吹く風とばかりに、毎日毎日豪華な生活を続けて、酒を飲んだり歌を唄ったりして暮らしていた。こうして三四年間が夢のように過ぎ去つたが、その間、洛陽からは一步も外へ出ようとしなかつた。

ある日のこと、孫恪は、ひょつこりと従兄にあたる張間雲に出会した。この人は当時隠士と目されていた。孫恪はなつかしがって、「随分長いことお目にかからなかつたので、色々と話したいことが山ほどもあるんですよ。どうか、お荷物などをそっくり持つて、私の邸へおいで下さい。それこそ一晩中でも話し明かしましょうや」

と言つた。張間雲も喜んで、約束通りに早速やつて来た。二人は、夜半すぎまでよもやまの話をしていたが、愈々寢に就こうとい

う段になつて、何を思つたのか、張間雲は孫恪の手を握りしめると、声をひそめて、

「私はね、かつて道術の修業中に伝授を受けて会得しているのだから、今、あんたの言葉遣いや顔色を観察すると、容易ならぬ妖氣が漂うている様に見受けられるのです。何か特に変つた、不思議なことにぶつかつた覚えがおありではないですか？ 大小どんなことでも包み隠さずにみんな話してみして下さいませんか。さもないと、きっと禍<sup>わざわい</sup>をうけることになりますよ」

と言うのである。

「格別、これと言つてそんな心当りは無いんですが——」

孫恪が不思議そうに答えると、張間雲は更にまた続けて言つた。

「大体、人間はみんな陽氣を具えているものですが、妖怪は陰氣を受けているものなんです。もしも人間の靈魂の力が死魄に打ち克てば、その人は長生きができますが、死魄の方の力が強くて靈魂を衰えさせると、その人はたちどころに死んでしまうのです。だからこそ鬼怪の類には形体というものがなくて、全部が陰の氣なのです。仙人には何の影も無いから、全部が陽の氣だと言えます。陰陽の盛衰や魂魄相互の戦いは、人の体内にあつて微妙に行われているのであつて、一旦調和が破れると、その人の氣色<sup>けしき</sup>の上にすぐにはつきりとそれが現われて来るのです。今、あんたの顔色から察すると、陰氣が陽氣をうばい、邪氣がすでにあなたの臟腑の中にまで食いこんでいるのです。本当の精氣はすでに消耗して、精神も知覚作用も次第に衰えており、いのちの液汁ももう尽きようとしている状

態で、生命の根源がもう動揺している証拠です。あんたの骨は今や

ているということ自体が怪しいんですよ」

腐れんとしており、お顔には何の血の気もありません。妖怪があなたの中に入りこんでいるのは、もう紛れもない事実ですよ。どうしてあんたは、そんなに何かを隠していて、事実を究明しようとはなさぬのですか？」

張間雲の話を聞くと、孫格も大いに驚いた。そう言われてみると思い当るふしもあったので、袁氏を娶るに到った一部始終を従兄にうちあけて話した。今度は張間雲が驚いて、

「妖怪は、きっと彼女に違いない。しかし、そうだとすると、一体どうしたらいいだろうねえ？」

と、思案に余った様子である。

「私の見たところでは、妻の袁氏には何の怪しい所も無いように思えるんですが――」

「袁家というのが、その女の子たった一人を残すのみで、この広い世の中に親戚一軒も無いのだということが有り得ましようか？ 第一、それほどまでに聰明利発で、何も彼もよく弁え



張間雲が押えるように断定した。そこで、孫格が、

「私はこれまで運が悪くて、長い間衣食にも事欠いて困っていたのですが、袁氏と結婚してから、それこそ息をついたようなものです。ですから、その恩誼にそむくことはできぬと思いますので、一体、どんな風に計を立てたらいいのでしょうか？」

と言うと、張間雲は色を変えて怒った。

「いやしくも男一匹たる者が、人間界のことすら自分でちゃんと処理もできぬくせに、どうしたら鬼によく奉仕できるかなどと気にしているんですか！ 左伝にも、妖は人に由って興る。人、すきま無ければ、妖は自ら作ることなし」と書かれているじゃありませんか！ それに、その恩誼と御自分の身体とを較べてみて、どっちが一体大切なんです？ あなたの生命が危険に類しているというのに、鬼怪から受けた恩誼がどうのこう

のと言っていられますか？ こんな簡単な道理は、子供にだって判

っていますのに、男一匹たるあんたに判らなくてどうするんです？」

叱りつけるようにこう言ってから、

張間雲は又続けて言った。

「ここに一振りの宝剣があります。

これは、あの千将にも匹敵すべき名剣なんです。どんな妖怪や魔性のものでも、これを見ればたちどころに消滅する筈で、これまでも数々の靈験があったものです。明日の朝に、これをあなたに借してあげますから、それを持って奥の彼女の部屋へ行かれれば、妖怪めが狼狽することは必定です。昔、かの王度という人が、宝鏡で鸚鵡の精を照射したという、その功能に勝るとも劣ることはない筈です。そうでもないことには、あの女との愛欲の情を断つことができませんよ」

こうして夜が明けかかると、孫格もやっと決意ができて、遂にその宝剣を借り受けた。張間雲は別れをつけに来たが、去るに臨んで、孫格の手を握りしめて、

「うまく、機会を掴んでしとげなさいよ」と励ますのであった。

(童)(心)(仏)(心)(1)

しあわせさん

こんにちは

森の朝は、いつも早起き鳥の声で明けます。

「君は、毎日が楽しそうだね」

お日さまが、すっかりのぼったころ、ものぐさきつねが、ほらあなから出て来て、早起き鳥にききました。

「ええ。うれしくて、楽しくて、しかたがありませんよ。」

早起き鳥は、目をクリクリとさせて答えました。

「へー。ぼくなんぞ、毎日がつまらなく

て、いい事なんか、これっぽっちも、ありやあしない。」

きつねが、うらやむように、いいました。「きつねさん。それならね。朝早く起きるんですよ。そしてね。ほらあなの戸を、あける時に、『はい。たいへん長いこと、お待ちせいたしました。しあわせさん。どうぞ、おはいりくださいませ。』って、いうんですよ。にっこりとわらってね。これを毎日、だまされたと思って、やってごらんなさい。きつと、しあわせさんが、あなたの家に、やって来ますよ。」

早起き鳥は、こういうと、チチチチと鳴いて、飛んで行きました。

その両羽に、お日さまの光が、金色にあたって、まるで、しあわせの粉をちりばめたように見えました。

(桐)

孫格は、その宝剣を持って、室内に隠れていたが、心の中の一方では、どうにも手を下すに忍びない気持が募っていた。

ところが、袁氏の方では、忽ちのうちにその気配を覺って、柳眉を逆立てんばかりに憤って孫格に詰めより、

「困り切っていた貴方を、何一つ不自由のない、楽な身分にしてあげたのは、この妾なんですよ。その恩誼をもちえりみず、こんな

大それた害心を抱くなんて、貴方のような情無い根性の人間は、犬や豚でもいやがって喰いますまい。そんなで、よくまあ、人の世に節行を立てるなどと、偉えらそうなことが言えたものですわ！」

と怒鳴り立てた。孫恪は、彼女にこっぴどく罵られて蒼くなり、慚はづかじ入ってうなだれたまま、

「従兄に教えられてしたことで、私の本心からではないんだよ。

本当に、血をすすって誓を立てたっていいが、もう二度と再びお前を疑ぐったりなんかしないよ」

と言ってあやまり、冷汗をしとどに流しながら地面に跪ひざまづいていた。袁氏は、彼が隠し持っていた剣を探り出すと、まるで蓮根でも切るようにその剣をずたずたに寸断してしまった。孫恪はそれを眼の前に見せつけられると、ますます怖おそろしくなつて来て、いっ、此の場から逃げ出そうかと考えた。何も彼も見すかしている袁氏は、

その氣配を察知したものか、急に優しい態度で笑い出しながら、

「あの張間雲という小人は、従弟たる貴方に正しい道義というものを教えないで、却って人に悪いことをさせようとした人間です。今度やって来たら、それこそこっぴどくやつつけてやりますよ。しかし、貴方の本心は、そんなことを教わったって出来っこない人だということが判りますわ。妾が貴方のところへお嫁に行つてから、もう幾年にもなるんじゃないやありませんか！ 貴方が何も妾に水臭く氣を置くことなんか、ないではありませんか！」

と言うのであった。孫恪はそれを聞いて、やっと少しは安堵したのである。

それから四五日経つと、孫恪は出かけて行つて張間雲に会い、怨みまじりで言った。

「何の為に貴方は、虎のひげをいじくるような危い真似をさせたのです？ すんでのことにとやられてしまふところでしたよ」

宝剑はどうしたのかと訊ねたので、袁氏によってあたら名剣がばらばらに寸断されてしまったことを話した。これには張間雲も大層驚いて、

「私の力では、もう、どうしたらいいのか、分らなくなった」

と言って、それからひどくこの袁氏を恐れて、二度と再び孫恪のところへ寄り付かなくなった。

その後、十余年の歳月が流れた。袁氏はその間にふたりの子を生んで育て上げたが、いつもきちんと家庭をとりしきつて治め、だらしのないことは微塵も許さぬという締めかたであった。

後日、孫恪は長安へ出向いて行き、古くからの友人で、当時宰相となっていた王緒に面謁することができた。王緒は孫恪を南康の張万頃大夫に推薦して、その配下の経略判官の職に就けるようにして呉れたので、孫恪は妻子を伴つて任地へと出発した。その道中、袁氏は、高い山や青々とした松林を見るたびごとに、じいっと眺め入つては時を忘れて、何となく浮かぬ面持ちをすることが再々であった。

丁度、一行が端州へ来た時に、袁氏が急に言い出した。

「ここから半日ばかり行つた先の、河のほとりに、峽山寺というお寺があります。妾の実家に以前居つたことのある惠幽という和尚

様が、今この峽山寺に住んでいます。妾たちと別れてからは、もう何十年にもなるでしょう。この和尚様は、既に相当な法臘を積まれた老僧で、人の一生の禍福を良く鑑別なさるばかりか、苦しみに悶えてゐる人を救い出すこともおできになります。通りがかりにそこへ立ち寄ってお齋を供養しますれば、貴方が南方へ着任されるに ついても、その功德で一段と幸福が増えることと思ひますわ」

これを聞いて孫格も賛同したので、その老和尚に供養するための野菜ものなどを準備して、その寺へと航行した。

峽山寺へ着くと、袁氏は大層愉しげに着替へをしたり化粧を直したりしてゐたが、やがて二人の子供をつれて老和尚のいる僧院へ出向いて行つた。彼女は、このあたりの勝手をいかにもよく知つてゐるらしいので、孫格は妙なことだわいと不審に思つてゐた。さて、袁氏は、老和尚の面前へ出ると、碧玉で造つた一連の環を恭々しく和尚に献じて、

「これは、昔、この僧院にあつたものなのです」

と言つたが、そう言われても老僧には、何のことだかよく判らぬ様子であつた。丁度、お齋が終つたその時である。突然數十匹の野猿が、庭先の一本の大きな松の木から、手と手とでつながりながら下りて来たかと思うと、孫格たちの食卓の上へ昇つて来て、膳部の上の残りものを喰へ始めた。間もなくそれを喰へつくすと、ききーと啼くような、又笑うような声を立てて、垂れ下つてゐる藤や蘿に飛びついて行くのであつた。

この時、妻の袁氏は、見るも痛ましい面持ちで飛び去つて行く猿

どもを見やつてゐたが、やがて筆を借りると、僧院の白壁の上に一首の詩を記し始めた。

人の世の、あだなる情にひかれつゝ、  
ゆくりかに身を変えしことそも幾度、  
友のあと逐いて山に帰らんにかかじ、  
長笑一声して烟霧はふかし。

袁氏は、詩を題し終ると、筆を地上に投げうつて、二人の子供の頭を愛撫しながら暫く咽び泣いてゐたが、やがて孫格の方へ向き直つて、

「どうぞ、おしあわせにお暮し下さいませ。これでもう、永久にお別れ致します」

と言つた。彼女は矢庭に着てゐた衣服を引き裂いたかと思うと、俄かに一匹の老猿に変化して、ききーと啼きながら何かを待つてゐた野猿たちのあとを追ひ、高い樹の上に躍り上つて行つた。深い山奥に今や姿を消そうとする時にも、はるか向うから、名残りおしげにこちらの方をふり返つてゐるのが見受けられた。

孫格は、驚きと懼れとで、まるで魂のぬけた人間のように呆然とつっ立つてゐたが、暫らく経つて漸く吾に返ると、二人の子供の頭を撫でながら悲歎の涙にかきくれるのであつた。

やがて、涙をぬぐつて、老僧にかの猿のことを訊ねてみると、老和尚もこの時になつてやつと昔のことを思い出して、次のように物

## 扉の御法語

をして教えを受けました。この問答は勅修御伝には八条あり、九巻伝には十条が出ています。

この御法語は勅修御伝第二十巻「上人つねに仰られける御語が、彼との問答の個所でなく、詞」に出ています。この巻のどのお詞も一つ一つが一言にして出ています。従ってこの御法語は上人が繰り返し述べられ、浄土宗の何んたるかをお示しになったものですが、中でも扉の御法語は、浄土宗の奥義というより、仏教の真ずいをずばり一句でお表わしになったといつてよいでしょう。

またこの御法語は、「禅勝房

に示されける御詞」の中にも出ています。禅勝房は遠江国蓮華寺にいて、天台を習学した人ですが、どうにも安心が得られず、熊谷の入道の許に教えを乞いました。やがて彼は熊谷の紹介状を持って吉水に上人を質ね、「無智の罪人の、極楽浄土に往生する事の候なるを」教えて頂きました。彼は百余日に亘って上人の許で、いろいろ質問

をして教えを受けました。この問答は勅修御伝には八条あり、九巻伝には十条が出ています。それで勅修御伝には、扉の御法語が、彼との問答の個所でなく、詞」に出ています。この巻のどのお詞も一つ一つが一言にして出ています。従ってこの御法語は上人が繰り返し述べられ、浄土宗の何んたるかをお示しになったものですが、中でも扉の御法語は、浄土宗の奥義というより、仏教の真ずいをずばり一句でお表わしになったといつてよいでしょう。

語った。

「この猿は、儂がまだ小僧だった時分に飼っていたものです。開元年間に、皇帝の御使者の高力士殿がここへ見えられた時、この猿がよく人語を解して利口なのが、大層お気に召して、絹一匹と交換して連れて行きなされたのじゃ。この猿は洛陽へ上って高力士殿から玄宗皇帝へ献上されたということじゃった。その後も、都から天子のお使いが来られたその度毎に、この猿が人間以上に賢くて、ずっと上陽宮の禁苑の中で飼われていると、何を伺っておりましたじゃ。あの安史の乱の後には、何処へ姿を消したもののやら、と、その消息が判りませなんだが、今日ここで、再びこの猿の不思議な変化に遭おうとは、全くもって意外千万のことでしたわい。この碧玉の環は、ずっと先に阿陵から来た外人がお布施代りに儂に呉れたものですが、あの当時、猿の首につけてあったので、その後も身につけて持っていたものと思われます。さてさて不思議な因縁と申すよりほかはなく、拙僧も今にして始めて想い出しましたわい」

その後の孫格の愁歎ぶりは、はた目も憐れなほどであった。彼は、峽山寺のほとりに六・七日間船を停めていたが、微かな期待も所詮空しく、やがて二人の子供を連れて船を戻し、洛陽の元の家へと帰って行った。もはや、任地へ赴いて就職するなどという気持は、どうしても起らなかったのである。

(原名「孫格」、裴鏘「伝奇」より)

(筆者・大正大学教授)

## 近代高僧伝

# 山下現有伝

る土地の面積の大小によりて、日課となせる念仏の数を計算せし者さえありしと言う。以て其の盛なりしを知るべし

と述べている。

はてしなく広々とつづく濃尾平野は信仰心の篤い土地である。「一人出家すれば九族天に生る」といって、在家では出家する人のあつて増上寺に進んで大僧正となられた大島徹水上人は尾参の念仏の盛んなるさまを追懐して尾西には現有上人あり、尾東には鳴海山に生涯不臥の隠遁者亮光上人あり。三河には昌光寺の志運律師、大樹寺の説門僧正、荒井山には求道德演上人、貞照院の誠憧和上あり。東三に悟真寺山田僧正あり。此等の龍象林の如く其の地に割拠して、大いに教線を揮い、尾西両國の念仏の隆昌なる、この時を以て最となす。此の頃在家の信者中、此等諸師の教化に浴したる者の中、田畠の耕作に従事する間は、珠数を手にして念仏を数うること能わざるを以て、耕作せ

明治十年代の頃の事である。現有が津島在中一色円成寺に住したのは明治十二年六月、四十八歳の時であつた。円成寺は関通上人の建立した寺であり、現有また上人の念仏信仰に深く私淑していた。それとは知らずに円成寺では住職を欠き、信徒は日夜よき住持を迎えようと探し求めていた時、白羽の矢が現有に向けられたというのであるから、寺でも此上なき幸せであり、現有も専修念仏の出来る生活環境に入ることゝ殊の外喜んだという。これ程、寺院に入ることゝ喜んだ事は前後を通じてなかったらしい。

明治二十年のことである。浄土宗に宗制が布かれることになり、一宗全般が騒ぎだし、五箇本山の住職は全て辞表を提出して、退院したことがあつた。時に大本山百万遍知恩寺住職を拝命したが、本山法主となることを再

三辞退するも、宗務当局は容易に聞き入れない。万策つきた現有はこっそり裏門から逃れて、矢張り関通上人に縁り深い北野の転法輪寺に隠栖してしまわれたという。そのようなことも何時しか忘れられ、当の本人は世間と隔絶して、静かに思うがままに称名念仏をつづけて居られた。所が有能の仁徳高い僧を何時までもそのままにして置きはしなかった。一宗の僧侶は再び増上寺法主に選挙してしまつたのである。迷惑なのは当の本人、法主御就任招待のための使僧が北野に来て初めて、法主になるということを知つたという始末。無論固辞されたが、二度目の使僧が来られた時には本堂で施餓鬼の法会を修しておられた。再三の招きにことわる術を失つた現有は使僧を客間にまたせたまま、法要の終り次第裏庭の木戸からこっそりとぬけ出て、上京して辞退の計をめぐらさんものと意を決して、京の町を後にしようとしたのである。所が途中で檀王法林寺の讓譽良修にばったりと会つてしまつた。良修は早速当局に通報する、当局は馳せ参じて宿所をおそうということで、通るすべなく、そのまま増上寺に到り本堂前に拝されたのが、晋山式になつてしまつた

というエピソードが残されている。時に三十年六月であり、翌三十一年五月には大僧正となった。上人が本山に出ることを固辞しつづけたのは、独り静かに念仏を申さんがためであった。上人のお念仏は関通流の念仏で、念仏申す御口元と念珠を手繰られる左の指は、殆んど反射的と思われるほどに動いて止むときはなかったということである。

現有は天保三年（一八三二）八月廿八日、

尾張国丹羽郡西成村大赤見に山口安蔵の長男として生れ、九歳の時伊勢松坂樹敬寺の有譽梧雲に就て出家して、名を俊敬と改めた。弘化元年十三歳になった俊敬は江戸に出て増上寺の学寮賢從寮に学び、一時京洛に掛錫したこともあったが、嘉永七年には選ばれて山下谷安祥室の寮主となつた。其後俊敬は沢賢・辨有・現有と改め、姓山下は彼が増上寺山内山下谷に住していたからであったという。明治三年三月には宗命を奉じて、徹定と共に防長二州の宗侶養成のため山口善性寺に山口講学場を開き、居ること四年に及び、その間山陰山陽に遊化して大日比三師の芳躅を慕うと共に、これが機縁となり、関通上人をも私淑するに至つたのである。以来幡隨院・円成



寺・百万遍知恩寺・転法輪寺・大日比西円寺・増上寺を歴住して、三十五年五月野上運海大僧正の後を承け、七十一歳の老齡の身を以て、辞するに由なく知恩院門主に補せられ、浄土宗管長となつた。

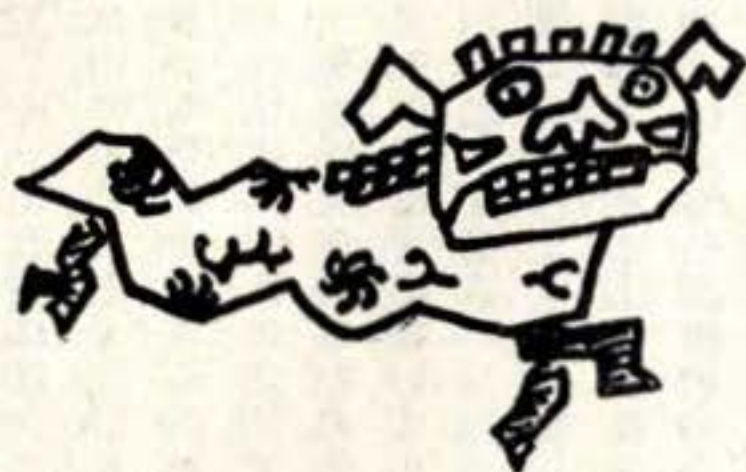
知恩院に上山されても、平素は僅か八畳と四畳半の部屋で起居し、朝は暗いうちから誰よりも早く起き、御内仏の香花燈明から供膳茶湯の一切を、人手をかりずにお給仕し、肌膚の洗濯なども自ら浴室でやられたという。又在山三十三年の長い間には宗祖法然上人の御忌をつとめ、阿弥陀堂を再建するやら、華頂婦人会を創設する等、寺門の興隆に尽瘁して今日の美観を呈する一翼となり、昭和五年

白寿（九十九歳）を迎え、翌六年七月一日より七日間、百歳を記念して、上人の発願で別時念仏浄業会を修した際には、会員五十名を限る予定のところ、その徳を慕って集るもの連日三百名を下らず、特に最終日には四百八十六名に及び、勢至堂に念仏の声満ち満ちたと言われる。

元来上人は、病弱な身であつたにかかわらず、養生と信心の培養につとめ、念仏の策励に一身を捧げた結果、百三歳の長寿を保ち、昭和九年四月十一日、日下主治医に「從來長々と御厄介になりました。御つくし下さつた御好意は生々世々忘れませぬ。厚く厚く御礼を申し上げます。これでお別れをしますから、明日よりは来て頂かなくてもよろしゅう御座います。御十念を唱へてお別れを致します」といって十念を授けられ、その日の夕刻八時四十分念仏の声と共に、安養の浄土におかえりになられた。法名を謙蓮社孝譽上人真善妙阿葵堂現有大和尚という。

（大 橋 俊 雄）

# 正月料理の話題



編集部

時計の針が、刻々にきざまれ、一〇八の除夜の鐘の音を境に、正月を迎えた。が、近頃の我々の日常生活は、どちらかといえば、所謂、バタ臭いものになっている。

そんな世の中であって、正月の松のうちだけは、日本調がゆたかである——戸ごとには六〇〇年も前からはじめられたという門松が建てられ、そして、流行のフラ・フープに変わってたこがあげられ、追羽根の音があちこちにきこえるのだからなつかしい。加えて元旦の食卓を飾る正月料理、これがまたなかなか意味深きもので、一つには古くからの魚国日本を表象し、一つには武道華やかなりし日本の昔をしのぼしめる。

仙台の民謡『さんさ時雨』に、

酒の肴に数の子よかる

親はにしん(二親)で子は数多あまた

という文句があるが、ニシンの卵巣を数の子と称して、正月料理の筆頭に加えたのは、数の子——つまり子沢山ということになるが、それよりも、元旦に際して、子供の成長

子孫の繁栄を誰れもがこい願っていたにちがいない。

正月料理の重箱の中で、数の子と肩をならべているものに田作りがあるが、これも正月の縁起をかついだものである。というのは、田作りは結局カタクチイワシと称するイワシであって、これを一たん煮て干したものは煮干としてダシにしか使われないが、田作りとして正月料理に大いに巾をきかせて登場するのだから妙である。これは昔、カタクチイワシが豊魚の際、浜で干しあげて、十束ひとからげにして田の肥料としたからであるが、主食である米の肥料という意味で、縁起がよいことから用いられるに至ったということが古書に出ていゝし、これを一名ゴマメといえは「五万米」と書いて字のごとくいよいよ目出たいのだそうだ。

次に昆布巻に移る。これにもピンからキリまであるが、本格的なものといえば、フナを昆布で巻いて煮たものである。ところで、なぜフナが本格的かという、そのわけはこうである。——その昔天武天皇の頃にフナの包み焼というものがあった。これはフナの腹の

中に昆布をつめて焼いたもので、宮中の祝儀に用いられ、出陣の宴席にも登場したといわれるが、これがいつの世にか変って、昆布でフナを包んで煮るようになつたものだといわれている。

師走の頃、街で買う昆布巻きの中味は良く乾ハゼ、普通は出しがらの煮干か何かである。

外国人の往来の多くなつた近頃、色々な話題が出ていたようだが、その一つに蒲鉾の説明があるそうだが。フィッシュケーキというこじつけた英名もあるが、彼等にとってはそういわれてもピンとこないらしい。そこで「カ……マ……ボ……コ」と一応日本名を教えた上で、これは魚のひき肉で作ったソーセージのようなものです……と、その作り方まで説明しなくてはならないそうだ。ところがよく考えてみると、日本人である我々も蒲鉾は正月にかぎらずに食べてよく知っているが、その作り方になると「さて？」と首をひねる人が相当多い。そこで余談になるが、その作り方を簡単に御披露しておきます。

蒲鉾を作るには、まず魚肉をさばいて皮や

骨を除き、これをひき肉ひき器にかけ、更に機械臼でよくこねる。次にこのねっとりしたもち状になつたものに食塩や砂糖、澱粉、卵の白み、味の素などを入れるのだが、この量は秘伝に属するもので、ここにうまいまずいが出来、又地方によって異なることから、持ち味の特徴ができてくるのである。次にこれをいわゆる蒲鉾型にして板にはりつけて、蒸し籠にならべたならば釜に入れて一時間程蒸せばよい。こうして出来たかまぼこが「白蒲鉾」だが、これを更に焼くか、或は魚肉にまぜものを使わず、また調味料にほとんど塩だけをを用いて、蒸してから焼いたものが「焼蒲鉾」である。

白蒲鉾といえ、東海道線でおなじみの小田原の蒲鉾を思い出す。また焼蒲鉾といえ、大阪や、宇和島、東北は仙台の「ささかまぼこ」がその主なものである。

この蒲鉾の創始、及び名称は、古書によると、今から四百五十年程前に作られ、当時のそれは、ひき肉を丸めて串にさして焼いたが、その様子が、蒲色にこげた鉾のような形をしていたところから、「蒲鉾」という呼び

名が出たともいわれている。

正月料理にも登場するが、正月というよりか正月の飾り物になくはならないものにイセエビがある。まっ赤にゆだったイセエビがなくては、しめ飾りもお供えも拍子抜けの状態である。

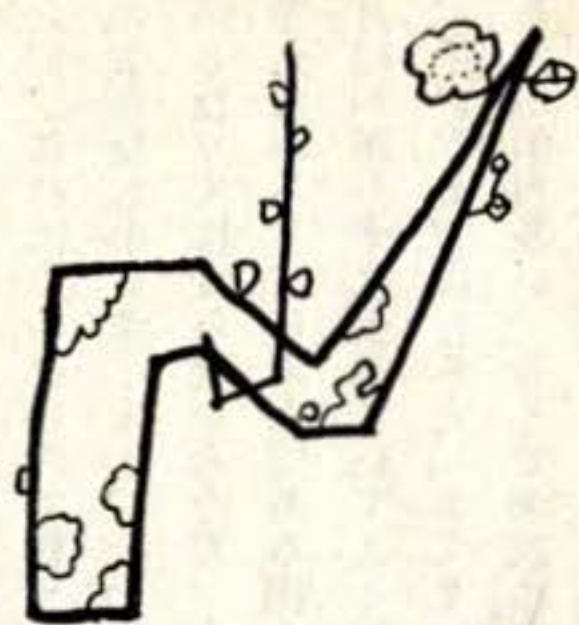
エビの腹部は幾つかの関節からなっているが、その曲つた関節をピンとのばしてはね上るところは、いかにも健康的なので、正月に際してそれにあやかつて長寿の老人をしのぶよすがともなし、又我々の健康をことほぐうではありませんか。

このほか正月に登場するものは目出たづくしである。「本朝食鑑」というものの本には、「古より宗廟の祭に供う」と明記されているタイが登場するし、この他、通称コハダの栗づけと呼んでいる処のコノシロという魚を酢につけて、それに黄色く染めた栗をまぶした、正しくはコノロシの栗づけ。海藻ホンダワラ、それからコンブ、数えて行くときりがないので、この辺でしめ（注連）ることに致します。

# 眞理の花たば

——若き女性への仏教入門(一)——

佐藤良智



序  
講

若きいのち

花ばなの

地上に咲くのは美しい

宇宙のどこかの星の世界に

花が咲いているであろうか

わたしたちの住む地上にだけ

花ばなが咲いているのであろうか

それは、わからない

ただ、この地上に花の咲くのは美しい

人びとが花を愛するようになったのは

いつのころからであろう

花を愛するようになった

人間というものは、また、美しい。

人間にも花が咲いている

幼な児は花だ

幼な児のえくぼは  
花の花びらだ

少女も、また、花びらだ

にっこり笑った花だ

つぼみの花だ

いや、すみれの花だ

青春を讃える

若きいのち

これこそ花である

咲きほこる人生の花だ、

若いいのちは

讃えても

たたえきれない

麗わしい花だ。

わたしは、永遠の美、若きいのちを、地上に於ける最も美しく尊いものの一つであると思う。この花のように美しい、若きいのちが、そのすがた、かたちのように、こころも

また純潔で美しいことを疑わない。こころのうつくしいことは、これまた、花の美しさにおとらない。

花のように美しい、若きいのちが、内に、たたえた、こころの美しさによって、ますます燃えるような、美しさを、地上にふりまくことができたなら、地上は樂園となろう。地上を樂園にすることは、人間の永遠の夢である。花を愛するところが、ひとびとのところにひそみ、こころを豊かにするうちに、地上を樂園にするという、永遠の夢をもつことが、ひとびとを上げまし、理想の光りをもたしめる源となるのだ。

### 真理の花束

心のうちに咲きほこる花。真理の花。その花は、人々の行動となって地上樂園の源となるのである。

わたくしは、ここに真理の花束を、しっかりとこころに握りたいのである。その真理の花束を、若きいのちに捧げた

い。

地上に人間が生れて、かぎりのない時が流れた。

人々のところのうちに、真理の花が咲き初めたのはいつのころか。それは知らない。

長い年月の間に咲き競った真理の花束は、かぎらない。どこから真理の花は、くるのか。そして、どのように地上

に咲いたか。

わたくしは、限りなく咲いた花をすべて、ここに、あげることはできない

あみだ経には、

青い色には青い光りがひかり  
黄色い色には黄色い光りがひかり  
赤い色には赤い光りがひかり  
白い色には白い光りがひかる

とかかれています。

炎ともえる太陽の、きらきら光る、南のくに、インドの花の色は、本当にひかっているにちがいないと思う。

さまざまの、色が、その色のままに光る。インドの花は美しいことであろう。そのインドに、咲き出で給うた、釈迦、に世尊、仏陀は、古今に絶した、美わしい真理の花たばを、かいな一杯に、いただき給うて、この世に、あらわれました。

れい峰ひまらやが、幾世変らない雪をいただいて、そびえたつ、印度の空は、なんとめぐまれた自然であろう。このよき天然の美のなかに、また、たぐいない、すぐれた、人を、花さかせた。希有ということばがある。これをこそ、希有と、

いうのであろう。

この希有のひと、いな、仏陀によって、地上に花さかせ給うた、真理の花束の、何本かを、この講に花さかせたい。それが、若き、いのちの、力となり、希望となり、あこがれとなれば仕合せであります。

ぶつだのことばは、そのままに、残っているが。現代人の著作のようなかたちでは、決して残ってはいない。

それは、経典という、かたちで、残されているのです。

おびただしい経典は、仏陀が、皆、説き給うたのであります。しかし、肉身のぶつだが、皆、説かれたのではない。

永遠のぶつだ、そうです、ぶつだは、永遠なのです。その永遠のぶつだが、すうとら、すなわち、経典という形式で説かれたのです。

「わたくしは、このようにきいた」ということばで経典は常に始まっています。

永遠の、ぶつだは、今も尚、真理を説かれている。未来永劫に、とかれるでしょう。それを聞くのはだれか。

耳あるものは、だれでもきくことができる。こころの耳です。

真理の声をきくことのできるものほど、仕合せなものはない。

こころの耳できいたことばが、真理の花たばとしておびただしく残されています。

花のことばです。

華でかざられた經典。華嚴經があります。真理の華。法華經です。

永遠のいのちを讀えた、無量壽經。等等。

かぞえきれない程沢山の花のことばです。

みな、こころできいた、永遠のみ仏のことばです。

真理の花たばは、このようにしてかぎりなく人の世をかざり、宇宙をかざる。

わたくしは、真理の声をきくことが、どんなにか、仕合せのことであるかを知っている。

さて、しかし、本当の仕合せは、ただ、きくだけではない。

真理のことばに、感動することは、自ら、身のおこないとなってこなければならぬ。

おこないのなかに、仕合せがある。  
おこないのなかに、人の生きがいがある。

真理の花たばは、人に、おこないの、清きおこないの、尊きおこないの、切ないまでの美しいおこないの、花みちしるべとなるものです。しかし、これらのおこないは、花々しいものであるではありません。

つつましい、日々のいとなみのなかにあるものです。日々のいとなみのなかに、つつましく、しかも、力強くあるおこないです。

さて、講を追って、行いの源となる。真理の花たばを若きいのちに  
ささげたい。

(筆者 大正大学教授)

## 謹賀新年

法然上人鑽仰会

「浄土」編集部一同

# 光明浴

——心のビタミン——



山本恭雄

歴史上、今日程不健康な時代はないと思います。憩の場である家庭もマスコミの波に洗われております。社会悪、政治なども益々近代病をおしすすめておるようであります。

ストレス学説のハンセ・セリエ博士は、これらを精神生活と肉体生活の關係に求めておりますことは極めて興味あることであります。

よく眼を開いて極微の世界を眺むれば、今も又私共の頭上に、世界の世論の云々に拘らず姿なき殺人魔といわれる死の灰がふりそそ

いでおり、今核実験は止められたとしても、

その量は十年の後迄増大し、現状と同じになるには数十年の年月を必要とするのであります。もはや雨の中に、土壤の中に、米の中に人体の中で、牛の乳より精製の粉ミルクの中で、検出されている事実。カルシウム分と同じように骨にたまり、血液障害、白血病、癌の根本問題になりつつあります。

御神事と称される奈良春日大社の鹿の角狩りは年一回生え変わる角を切るのである。その角（骨）の中の放射能が、年々年と共に増大している事実は、カルシウム分を必要とする幼児の身心育成の為にも、将来の人類福祉の為にも極めて憂慮すべき事なのです。

法然上人は、

「宿業限りありて受くべからん病は、いかなる諸々の仏神に祈るとも、それによるまじき事也。祈るによりて病も止み、命も延ぶる事あらば、誰かは一人として病み死ぬる人あらん」（浄土十月号参照）と申されております。

病というものは、肉体的、精神的、社会的なものにしても、因果応報、諸縁起生であるから、病に罹ってから神仏に祈っても治るものではない。もし治る位なら病人や死人がな

いはづだと申されているのです。これは昨今病氣になり神仏に祈り、新聞の社会面に表われる事などは、非科学的な事だと八百年も前に上人は現代医学の予防医学の立場をとられた事に敬服するのであります。如実智、即ちありのままの姿を知る智慧、大宇宙の生命力の中に動いている私共の姿を示されたのです。

○ 昔といつても、私が幼い頃は朝日に向って拝む人をみかけたものですが、今では、月に

パイオニアが打上げられるからでしょうか、滅多にみられません。拝む人は原始的なのでしょう。

私共が太陽を拝むのは物体の太陽を拝むではありません。

太陽がなければ、地上に在る人間も動植物も、蟲けらに至る迄生きられないのです。

私共は日光のお蔭で、日々の生活を送っているのです。しかも太陽は、貧乏人にも、金持ちにも、善人にも、悪人にも、齊しく光と恵を与えて下さっているのです。

有難いこの事実に感謝する心が朝日を拝ませるのではないのでしょうか。

阿弥陀仏を拝ませる心も又同じです。みほとけも又我々万人に等しく光と恵みとを与えて下さっているのです。

太陽のそれは物質的なものであり、みほとけの慈光は精神的なものであります。

観無量寿經には

「光明徧照十方世界念仏衆生攝取不捨」と記されてあります。みほとけの光明は十方の世界を徧く照し賜うています。慈悲深いものなのです。

仏教ではこの兩者は一つである。即ち、「物心一如」、物質的なもの、精神的なものが一つであると説かれております。

智慧即慈悲の姿なのであります。

これを身近に考えて参りますと、家の周りでも暗い所にはカビが生えたり、病が発生したりします。

明るい所は実に健康的ではありませんか、社会でも三悪追放と申しておりますが、暗い所に悪は起るのです。

一方私達の心の中にもカビが生えることがあります。

よく人々は「眼をみれば心がわかる」と申していますが、やはりそこには明るさが関係しています。

例えば、淡い淡いといわれる淡柿でも、日の光に当たると、甘い甘いといわれた甘柿よりも甘い枯露柿となります。又石より堅い氷も照らされれば、やがては何よりも軟かい水となって参ります。

「天晴れぬれば地明かなり」であります。

私共の心の氷も又同じようなものです。

親鸞聖人は「煩惱の氷厚ければ菩提の水多

し」とみほとけの光にかされる心の氷をこのように申されております。

私共は昔より太陽の子として男は日の子、彦、女は日の女、姫として尊ばれて来ました。即ち仏の子として健全に生きぬく力を与えられている事なのです。

阿弥陀仏は、無量寿、無量光の仏様であります。限りなきみ光なのです。このみ仏の光明は十方の諸仏達から十二の光のみほとけ、十二光仏として称讃されているのです。

無量寿經というお経に

「もし衆生ありてこの光に遇うものは、三垢消滅して、身意柔軟なり、歡喜踊躍して善心生ず」といわれて、無量光仏の光明の功德をいろいろと称讃しておるのです。

この事は先に述べたように、心のかびも、又心の氷もなくなる事なのです。

○

この頃のように寒くなりますと、よく日向ぼっこを致しますが、私達はそれを日光浴とよんで健康によいといって、暖かな日差しを浴びるのです。即ち皮膚からビタミンが吸収される事を承知しているからです。

私は無量光仏の光に遇う事を日光浴に對して光明浴と呼びたいのです。太陽には物質的なビタミンが、光明浴には精神的なビタミンが自ら湧いて来るからです。

それは私共にとって必須の栄養素として、欠く事の出来ないであります。極微の世界であり共に目には映りませんが、諸行無常の世界の出来事なのです。

私共はものを拝む時に合掌致しますが、これはみ仏と私達凡夫が一つに帰する姿であることは御承知の通りであります。正に先述した物心一如の姿であるのです。

合掌の姿は光明浴の姿であります。そこには心のビタミンが創り出されているのです。

宗侶の中にも栄養万点と自負され乍ら、光明浴を忘れて栄養失調になる方もあると思えば、片村の農家の老婆が心から念仏三昧にしたり栄養の豊かの方もいられるのです。

即ち栄養素ですから少量でも、少しづつたゆまず服用する所に大切なものがあります。

光明の浴し方には理屈も方法もありません。禪の方では、「ただ凡情を尽せ、別に聖解なし」と申しており、ただ当り前のことを

せよといっているのです。

浄土宗の法然上人は七百五十年前に、

「智者のふるまいをせづして只一向に念仏すべし」と申されました。

「ナムアミダブツ」と申せばよいと申されたのです。無理解であり誰にでも申されま

私共にこれこそまさに精神生活における所の超綜合栄養剤を与えて下さったのです。大光明の中に生活する健康な姿をとかれたのであり、光明浴のサンムールでありうると思うのであります。

○

世間では仏教とか南無阿彌陀仏と申せば、死後の世界のように思われている方が少ないのであります。とんでもないことだと思えます。

私共はすでに生かされています。衣食住は勿論、人々のお蔭、自然の恵、御先祖の賜物であり、みな、み仏の懷の中での生活です。で、その中で生きぬく力を教えられているのです。生きる事は野良犬でも生きています。即ち生かされているのです。万物皆生きてい

る中で生きぬく事が大切なのです。

仕事は誰でもしていてもやりぬく所が大切なのです。仕事をするにも、生きぬくにも、体が大切です。「健全な身体に健全な精神が宿る」と申しますし、又「病は氣から」と言われています。体ばかり丈夫でもいけません。がやはり体が弱くては何も出来得ません。

社会の病も、世界の病も、分析すると私共一人一人の上にもどって来るのです。

法然上人は、「光明偏照十方世界念仏衆生攝取不捨」の心を

月かげのいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ（浄土宗歌）

の一句で私共に示されました。

先の御法語のように、病氣してから祈っても駄目だ、「今が大切なんだよ」とお歌でさとされたのだと思えるのです。

今日を健康に生きれば、明日は約束されます。現世を健全に生きぬく事が出来れば浄土は約束されているのです。

常に光明浴であり、合掌の生活、称名念仏の生活を送ることが、生きぬく唯一の道だと教示されたのであります。

新規会員

|               |       |
|---------------|-------|
| 県名            | 芳名    |
| 神奈川           | 林田智源  |
| "             | 白石広祐  |
| 熊本            | 大橋民秀  |
| 福岡            | 久保田勝代 |
| 北海道           | 渋谷隆道  |
| 茨城            | 照光寺   |
| 神奈川           | 伊藤泰善  |
| "             | 光伝寺   |
| 東京            | 長泉院   |
| "             | 正泉寺   |
| 東京            | 勝崎教信  |
| 福島            | 大上運心  |
| 兵庫            | 池上靈心  |
| 神奈川           | 新井智信  |
| "             | 門松操   |
| "             | 内田孝   |
| "             | 安西洋   |
| "             | 沢地良三  |
| "             | 下沢安治  |
| "             | 椎野浩三  |
| "             | 門松系子  |
| "             | 伊沢光雄  |
| (以上九名乃美堯界師紹介) |       |

編集後記

○明けましておめでとうございます。私たち編集子は、昨年一年間は沈黙をまもり続けて、ひたすら本誌の装幀及び内容の充実、定期発行をモットーに鋭意専心してきました。そのかげには同人先生方の血のにじむような努力がある。幸い会員の深い御協力を得て、面目一新することが出来たことは何より喜びである。この一年間多くのの方々よりあたたかい激励に併せて、余り沈黙ばかりしていないで、編集子の身の往来を披露するようとの言葉をしきりといただく。年新たまり気合も一掃したところで、また後記の筆をもつこととした。何卒宜敷く御鞭撻下さい。

○ここで一寸最近の関係先生方の動向をお伝えしよう。佐藤賢順先生、大学では相も変わらずカント哲学の

ゼミは人気のマト、寺に在っては、日曜講演を開いて教化に余念なく、さらに最近では諸処方ボウに講演に出かけられる。先生の仏教に関するユニークな見解はとくにインテリに好評の由。密雄先生、現在大正大学の仏教学部長の要職にあり、教学院の主幹として、また最近では、国宝大仏殿の修復および境内地の整備等繁忙の御様子、それに鎌倉という土地柄のため内外の名士の訪問あり、それに一流の実業家の集りに出講ともきく。良智先生、先年学生に惜しまれつつ学生課長を退かれてから専門の研究に没頭、とはいふものの、私学連盟、保育連盟の重要なポストにあるため仲々御忙しい。又伝説ある明照幼稚園三十五周年には、色々の記念事業を盛大に催された。本誌月月より、若き女性のために仏教入門を執筆いただいている。(宮)

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一力年

金六〇〇円

(送料不要)

浄土

正月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十三年十二月廿五日 印刷

昭和三十四年一月一日 発行

定価 五十円

編集人 竹中 信常

発行人 佐藤 密雄

印刷人 神谷 秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二二八七番

東京高等保育学校長  
駒沢大学文学部講師

内山憲尙著

B 6判一六〇頁

予価 一八〇円

送料 三〇円

## 仙教保育二十章

—図解・仙教保育の理論と実際—

内山先生は東京高等保育学校、聖美幼稚園などの経営にあたり、多年、実際の仙教保育を通じて、指導理念をつかみ、それを実践されてきた方であり、本書の執筆は、六・七年前より計画され、長い間資料をあつめ想を練つた上、このほど脱稿をみたものであり、幼稚園、保育所が数においては老大なものになつたにもかかわらず、適切な保育指導書を欠いている今日、まことに時宜をえたものと思います。

何卒、御一読をおねがい申し上げます。

(付録)

一、幼稚園関係法規

教育基本法、学校教育法抄、設置基準法

二、保育所関係法規

児童憲章、児童福祉法

東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)

申込先

青山書院

振替東京九九三〇三番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)  
昭和三十三年十二月二十五日印刷 昭和三十四年一月一日発行

浄土

第二十五卷

第一号

定価金五拾円(送料四円)

正しい信仰を得る為の

新興宗教の批判と分析

大正大学教授 竹中信常著

## 新興宗教

申込先

東京都港区芝公園十九号地の一  
浄土宗教化団中央本部

新書版 八九頁  
頒価 五十円  
送料 八円

本宗檀家一軒一冊

須藤隆仙著 (トラクト版)  
ガイド・ブック (二四頁)

## 浄土宗

申込先

法然上人七百五十年御忌記念出版  
浄土宗教学研究会発行  
北海道森町 森称名寺

振替 函館 一〇一九番  
頒価 三十円  
五十部以上一部につき二十五円  
実費